

# 創価女子短期大学紀要

金井正教授退任記念号

第 50 号 2019年2月





金井正教授 最終講義





# 目 次

## 巻頭言

新たな時代の幕開けに ..... 水 元 昇 (3)

## 最終講義

金井正教授 略歴 ..... (7)

学びの道の回想 ～明日に生きる花束を君に～ ..... 金 井 正 (9)

## 論 文

マッシリアのピュティアスとトゥーレに隠された謎 (2)  
..... 楠 田 直 樹 (19)

文法学習でのアクティブラーニングを可能にする  
ディクトグロスの有効性 ..... 山 本 成 代 (41)



〔巻頭言〕

## 新たな時代の幕開けに

創価女子短期大学副学長 水 元 昇

本年4月、新学科として待望の「国際ビジネス学科」が誕生した。開学以来2学科体制できたこの34年間を締め括り、新たな時代への幕開けとなった。開学より短大で教鞭をとってきた私にとっても感無量であった。

新入生として国際ビジネス学科1期生293名を迎え、新たな短大教育がスタートした。これまでの英語、ビジネスという特色を両学科の垣根をなくして、建学の指針の一つである「社会性と国際性に富む女性」をさらに強く輩出していける体制になった。

ここで、短大教育の歴史を振り返って、いくつかの点で教育と研究を見ていきたい。

まず、情報化という点で振り返ると、開学時は経営科、英語科という2科体制から短大教育は始まった。当時、経営科の講師として若手のひとりとして赴任した私は、大学院の頃に、日本で初めて作られた東芝の和文ワープロをマニュアル片手に必死で使用した経験があったためか、情報教育の走りともいえる授業を担当することになった。専門の人事管理論の授業は2年次からのスタートで、私にとっても機器を使う教育は初めてであった。当時は情報化という言葉すらまだ使われていなかった記憶があり、ワープロ、ファクシミリ、パーソナルコンピュータがOA機器の三種の神器とも呼ばれ、企業

でも機器はやっとオフィスに入ったものの、徹して使える人もまれで、OA（オフィス・オートメーション）化という言葉がひとり歩きしていたように思う。私の担当は、初年度は英文タイプライターを使った「タイプライティング」というもので、二年目になり、ワープロ機器が導入され、ワープロ教育が始まったことを昨日のこのように覚えている。

学生としての情報分野での短大教育の成果は、彼女たちの若い感性と努力により、例えば綺麗で見やすく使いやすい資料や書類を短時間で作り上げる能力を磨きあげた。さらに、社会にでて仕事に就いても見事な情報機器の活用は、君はどこでこれらの能力を身につけたのかとよく聞かれたようだ。しかも徹して学んだ知識も実社会で適応するものがたくさんあり、ある卒業生は上司の話を聞きながら、短大時代の授業を思い出し、家に帰ってノートを取り出し、話の内容を確認し、翌日には上司とその話ができたようで、さらに信頼と自信の学びを深めることができたというエピソードもたくさん生まれた。

その後、世の中は変化の連続であり、情報機器の進化、発展だけみてもさまざま、毎年のようにそれらの進化を先取りする教育へと短大教育にさまざまなものを取り入れていった。当初ビジネス文書をいかに綺麗に速やかに作成できるかが主眼であった機器の活用やプログラミング能力の養成が、その後ワードやエクセルなどのアプリケーションを使った情報機器の活用に変化し、さらにパワーポイントを活用したプレゼン能力の向上へと進化をしてきた。プレゼン能力の向上は、各種発表会に反映され、大学コンソーシアム八王子主催の学生発表会では、短大生の見事なプレゼンに対して他大学の教員・学生からも高い評価をもらい、全体のプレゼン能力の底上げに貢献したこともある。今年は4つのゼミから12件の参加があり、過去最高の件数となり新たな時代の幕開けを感じている。

また、嬉しいことに短大開学20周年の頃から始まったマイクロソフトの世界学生大会への挑戦は、30周年で実を結び、日本代表として世界へ行くことができた。その上、ワード部門の世界第3位という栄冠まで勝ち取るこ

とができたことは嬉しい出来事であった。そして毎年、日本代表選考の上位に短大生が名を連ねている。

さらに、インターネットの普及は情報化を進め、現在の iPad を全員に配付して、アプリまで作り、授業に活用する体制はもう 10 年近く前に全国に先駆けて始めることとなった。そのたびに教員や学生が活用能力の向上に取り組んできた。今は学生には当たり前、教員もほぼ全員が使いこなし、教授会でもペーパーレスとなっている。

また、開学当時は男女雇用機会均等法の元年ともいえるときで、女性の社会進出が進み始め、女性の力が社会に変化を突きつけ始めた時代でもあった。当初は全員が就職という短大の方針もあり、社会で有為な女性リーダーとなるための基礎力を短大で築くとの目標へ全力投球であったと感じている。秘書や客室乗務員などは一つのキャリアモデルとして、女性の活躍の象徴でもあった。そのため英語力や情報機器活用能力の育成は重要な課題となった。1 期生から毎年のように大手航空会社の客室乗務員や地上勤務のスタッフを輩出し、また大手企業の役員秘書を務める卒業生も輩出し、現在、海外で起業し CEO として活躍したり、大企業の執行役員となる卒業生が誕生するなど活躍の舞台は広がっている、さらに、短大で培った英語力を活かし海外へ雄飛し、国連職員や世界銀行で活躍する先輩たち、また国内で公認会計士、税理士なども輩出している。

このように、社会で通用する実践的な力、とりわけ情報機器活用力と英語力は短大教育の大きな成果となっていた。短大教育は社会で実践的な力と知識を身につけて、活躍できる学生を育てているとの評判で、多くの会社や業界からお褒めの言葉もいただいている。

これらは単なる一つの例かも知れないが、短大時代に「学びに挑戦した心」は社会でも継続的に学びを深め、何よりも、全国、全世界で地域や社会にあって「負けない心」を磨いた女性集団が短大時代の青春を誇りにしながら、創価教育のネットワークを広げ、姉妹の絆も強く、深く、友情と人生の苦闘を乗り越えながら一大勢力を作り上げている。また、短大時代の「学び

への挑戦」は、人格を磨き、負けない心を磨き、人生を輝かせる土壌を作り上げている。

この数年、短大を取り巻く環境の変化は激しく、定員割れをする短大や名門といわれた短大が募集停止や廃止に追い込まれるなど、短期大学という制度そのものの見直しが始まっている。例えば、さらに新たな職業選択の道として、明年度より、専門学校での準学士の認定に加え、専門職大学・専門職短期大学がスタートする。短大という制度の中でどう特色を鮮明にしていくのか。この数年、学長を中心に議論を尽くし、新たな道を模索しさまざまな改革を進めてきた。

「教育」と「研究」は大学の両輪である。開学以来、この創価女子短期大学紀要に掲載された数多くの論文、さらに研究ノートなどは、教員一人ひとりの教育力を高め、短大教育の支えとなってきた。学生の成長を願う多忙な教員生活の中で、コツコツと地道に研究活動に励んできた教員一人ひとりの汗の結晶でもある。

これからも私たち教員が一つひとつを大切に、いい教育とはなにか、そのために私たちができる研究とは何かと問い続けながら、この短大紀要を活用し、さらに短大教育の進化を作り出していくことを誓いとしていきたい。そしてこれからは冬の厳しさを覚悟し、私たちの教育力で、必ずや春を迎えゆくとの決意のままに、教育研究に努力していきたい。

「国際ビジネス学科」の1期生から始まる短大教育の新たな歴史を、ともに作り上げ、教育内容と教育手法、さらに研究への挑戦の日々を送っていきたいと決意している。

## 金井正 教授 経歴

昭和41(1966)年 3月 東京都立豊島高等学校卒業  
 昭和45(1970)年 3月 武蔵大学経済学部経営学科卒業  
 昭和47(1972)年 3月 明治大学大学院商学研究科商学専攻修士課程修了  
 (商学修士)  
 昭和49(1974)年 4月 岩手県立盛岡短期大学法経科専任講師  
 昭和50(1975)年 3月 明治大学大学院商学研究科商学専攻博士課程満期退学  
 昭和52(1977)年 4月 岩手県立盛岡短期大学法経科助教授  
 昭和60(1985)年 4月 創価女子短期大学経営科助教授  
 昭和62(1987)年 4月 創価大学経営学部兼担〔平成24(2012)年 3月迄〕  
 昭和63(1988)年 4月 創価女子短期大学経営科教授  
 昭和63(1988)年 4月 在外研究〔ニューサウスウェルズ大学、平成1(1989)年  
 3月迄〕  
 平成1(1989)年 4月 創価女子短期大学教務委員長〔平成6(1994)年 3月迄〕  
 平成3(1991)年 4月 創価女子短期大学経営科長〔平成13(2001)年 3月迄〕  
 平成6(1994)年 4月 創価女子短期大学教務部長〔平成7(1995)年 3月迄〕  
 平成13(2001)年10月 特別研究員(サバティカル)〔平成14(2002)年 3月迄〕  
 平成14(2002)年 4月 創価女子短期大学教務部長〔平成17(2005)年 3月迄〕  
 平成17(2005)年 4月 創価女子短期大学現代ビジネス学科長〔平成27(2015)  
 年 3月迄〕  
 平成18(2006)年 4月 創価女子短期大学副学長〔平成30(2018)年 3月迄〕  
 平成27(2015)年 4月 創価女子短期大学図書館長〔平成29(2017)年 3月迄〕  
 平成30(2018)年 3月 定年退職、創価女子短期大学名誉教授

岩手大学人文学部、駒澤大学経済学部、大東文化大学経済学部、武蔵大学経済  
 学部、日本大学法学部、明治大学大学院経営学研究科、兼任講師歴任





## 学びの道の回想 ～明日に生きる花束を君に～

金 井 正

2018 (H30) 年 1 月 29 日 (月)

13:00～15:00 101教室

在学生の皆様、卒業生の皆様、そして教職員の皆様、大変お忙しいこの時期にお集まり頂き有難うございます。短大生と創立者との絆を深めたこの101教室が、最終講義の場となる喜びを噛み締めています。

授業と同様に、お気に召さず退屈な講義となりそうですが、私の最後の足掻きとおもってお聞きください。

### プロローグ

昨年 12 月に 70 歳を迎えました。体力には自信がありません。でも、とてつもなく無理があると非難されることを承知のうえですが、気概だけは、今でも、これからも、いつまでも 18 歳の正義感に溢れた血気盛んな若者であり続けたいとおもっています。

ご存知のように「人生 70 古来稀なり」(杜甫「曲江詩」)とされています。確かに、厚生労働省(「平成 28 年簡易生命表の概況」平成 29 年 7 月 27 日、2 頁)によれば、私が誕生した 1947 (昭和 22) 年の平均寿命は、男 50.06 歳、女 53.96 歳ですので、その当時でも、70 歳まで生きるのは稀だったかもしれません。平均寿命が男女とも 70 歳を超えるのは、1975 (昭和 50) 年です。

他方、平成 28 年現在 70 歳の男の平均余命は、15.72 歳、女 19.98 歳です。平均余命で計算すると、私は 85.72 歳までは生きるかもしれません。現在 20 歳の女性の平均余命は、67.46 歳ですので、在学生の皆様は、87.46 歳位まで存命するのでしょうか。これは平均余命なので、それ以上生き続ける可能性があります。

ある海外の研究 (Human Mortality Database, U.C. Berkeley(USA) and Max Planck Institute for Demographic Research(Germany)) によりますと、「日本では、2007 年に生まれた子供の半数が 107 歳より長く生きる」と推計されているようです (「人生 100 年時代構想会議 中間報告」平成 29 年 12 月、1 頁)。この研究からすれば、2017 (平成 28) 年現在 10 歳である子が 107 歳ですから、在学生の皆さんは、100 歳位まで長生きするかもしれません。

人生 100 年時代に備えるために、社会制度の改革はもとより、個々人の生活の仕方も見直さなければなりません。昔もそうでしたが、これから、社会は、めまぐるしく変動することでしょう。移りゆく世の中の荒波に流されることなく、私たちに襲い掛かる社会からの挑戦に挑戦するために、学生時代のみならず、社会人になっても弛まず学び続け、賢く人生の荒波を乗り越えましょう。

これから、恥ずかしながら私の学びの道を辿ります。私の拙い経験を笑いの種として、他山の石として頂き、「明日 (あした) に生きる」皆様の一助となるよう願っています。そして、生涯にわたり学び続けて下さい。

私には、学びの道に導いて下さった二人の恩師がおります。大学時代のゼミナール担当教授と大学院時代の主専攻担当教授のお二人です。

## I. 学びのエントランス～大学時代～

学びの道の第一歩は、大学への進学でした。1947 (昭和 22) 年生まれの人たち団塊の世代の第一期生が、現役で受験を迎えたのは 1966 (昭和 41) 年です。そのときの 18 歳人口が約 249 万人 (大学への進学率は男 18.7% 女 4.5%) でした。2018 (平成 30) 年での 18 歳人口は、その半分以下の 118 万人と推計されています ([www.stat.go.jp/data/chouki/zuhyou/25-12.xls](http://www.stat.go.jp/data/chouki/zuhyou/25-12.xls))。入学試験の競争率は、30 倍以上ある大学も珍しくなかったと記憶しています。

そのような時代に、私の決断が失敗であったとおもう四つの苦い経験を味

わいます。

1966年2月、滑り止めと位置づけていた大学の試験の当日、発熱し、昼食を受け入れられないほどの体調でした。今でも思い出します。学食のトンカツ定食のキャベツしか口に入らず、トンカツを殆ど残してしまったこと。その日、国語の入学試験監督の先生が「ここの国語は、とても難しいから、できなかったといって、諦めないように…」とその部屋の受験生に向けていわれました。発熱でボーとして受験した私には、最大の激励となりました。受験したその大学は、我が家から自転車を通えるほどの距離でしたが、世間的には無名でした。その学園は、男子御三家として名を馳せる高校を設置していました。入学直後、高校の附属大学的な大学に進学したことに嘆き、大学選びは失敗であったと思い込みます。これが一つ目の失敗です。しかし、失敗とおもったのは、私の大いなる勘違いでした。国語の入学試験の監督の先生こそが、その後の私の人生に大きな影響を及ぼすことになる教授でした。この教授により、学びの道を切り拓いて頂くことになります。

二つ目の私の決断の失敗は、第二外国語（1・2年次必修科目）としてフランス語を選択してしまったことです。美しい響きに聞こえたフランス語に憧れただけで科目選択を決断したのです。フランス語は、私に取りまして発音が難しく、文法も面倒でした。いやいや受けた授業のひとつとなりました。四苦八苦したフランス語が、その後、フランスの会計学の学びの第一歩となるとは、そのときには思い至りませんでした。

三つ目の失敗は、3・4年次に配当されていたゼミナールの選択です。当時、軽い気持ちで、将来公認会計士か税理士になる心算でいました。そこで、財務会計の分野を研究対象とするゼミナールを選びました。国語の入学試験の際の試験監督がそのゼミの担当教授でした。とても厳しい教授で有名でした。その教授の担当する3年次の必修科目「財務会計論」の単位を落とす学生は、受講生の半分ぐらいでした。単位を取るためには、相当時間勉強しなければなりません。そのような教授のゼミナールは、やはり大変でした。商業高校出身の優秀なゼミメンバー（Seminaristen）は、高校時代に身につけた専門用語を駆使してよく発言していました。普通高校出身だった私は、ゼミ幹事ではありましたが目立たない存在でした。悪いことに、他大学の大学院在学中の先輩二人（その後、世田谷区駒沢所在および文京区本郷所在の大

学教員となります)がゼミナールの授業に参加していました。教授とともに、不用意な発言があれば手厳しく指摘します。周到に用意してゼミナールの授業に臨まなければなりませんでした。教授と大学院生間で、レベルの高い議論が交わされていると感じていました。ゼミナールの教室で座していること自体が、苦痛でした。ゼミの選択の決断が失敗であつたとおもいました。私が卒業時に執筆したゼミ論文は、ゼミ担当教授から渡された英語文献を使う羽目になります。

或る日、進路について、公認会計士を目指していることをゼミ担当教授に伝えました。するとこんな反応がありました。「公認会計士になって人のお金を計算しても面白くないヨッ」と、そして「それよりも大学の教員になったらいいのでは…」といわれました。公認会計士試験の勉強に嫌気が差していましたので、渡りに船の話に飛びつきました。半信半疑で、「僕でも大学教員になれますか？」と質問。可能性がないわけではないとの返事。私は、ゼミナールの授業で多くを語れるゼミ生(Seminarist)ではありませんでした。それでも、私をそのように買いかぶっておられたことに驚きました。しかし、その一言がありましたので学びの道に進む希望を抱くことになります。

それでも、4年次に就職試験に挑戦しました。アナウンサーになるという淡い夢を抱いて、放送局を受験しますが、すべて不合格。この就職試験の失敗も数に入れば、四つ目の失敗といえます。

アナウンサーの夢破れ、しかたなく、大学院に進学する決断をします。4年生の当時、その大学には大学院が設置されていませんでしたので、他大学を受験することになります。

## Ⅱ. 学びのオープニング～大学院時代～

大学は我家から一駅のところにあり、通学を楽しむことができませんでした。しかし、千代田区所在の大学院でしたので、都会にいたことを実感できました。その大学院の主専攻の担当教授が第二の学問上の恩師です。この教授は、大学院生が研究対象を自由に選ぶことを許していました。

少し難しくなりますので、眠りながら聞いてください。「会計学」というと一般には、帳簿記録方法や貸借対照表・損益計算書などの財務諸表作成の技術としての行為側面が強調されてしまう傾向があります。確かに、帳簿記

録にしても財務諸表にしても、実際の社会生活のうえで必要とされて生まれてきた社会的用具です。社会的用具である実践としての会計は、それが生まれてきた社会と密接に関わっています。「会計学」は、実践としての会計と社会・経済動向との関係性を解明する学問です。それにより、実践としての会計の現在を認識し、未来を予測し、そして社会の動向を観察することができます。授業では、「社会の洞察力の養成」を意識していました。

企業は、会計基準に基づいて財務諸表を作成します。その会計基準は、社会の要請を反映しています。会計に対するニーズは社会の変動から影響を受けます。企業が作成する財務諸表の内容は、時代とともに変化するのです。財務諸表作成のための会計基準も改変されることになります。

私の大学院時代の研究室では、そのような財務諸表作成行為のルーツがドイツにあるとしていました。そこで、ドイツ語文献を読まなければならなくなりました。でも、それほど勉強したわけではありませんので安心して下さい。英語もフランス語もドイツ語も、ほんの少しだけ齧った程度ですので、話すのは無理です。

修士論文は、アメリカの文献を基礎にした「会計における真実性に関する一考察」でした。そこでは、その当事に流行っていた「中立性」を強調する会計理論に反論を加えました。その執筆は、事実 fact と真実 truth について、意識を深くする契機になります。

さらに、博士課程に進学。フランスの会計制度についての研究に取り組みます。フランスでは、企業会計と社会会計が緊密であることがひとつの特徴でした。その研究の筋道をつけて下さったのは大学時代の恩師でした。その研究成果は、「プラン・コンタブルの改正とフォーラスティエの会計思考」と題して、会計研究学会東北部会で発表することになります。また、学会誌『會計』の掲載に至ります。

### Ⅲ. 岩手県盛岡へ赴任

学会発表がなぜ東北なのか。それは、岩手県盛岡市所在の県立短期大学で教鞭をとっていたからです。私が赴任することになる学科は、仙台市の某国立大学出身の教員で占められていました。教員人事については、その某国立大学に依頼していたようです。大学時代の授業「管理会計論」の担当教員が、

その某国立大学に異動していました。相談を受けた大学時代の教員は、私のことをよく覚えておられたようで、私を推薦してくださいました。大学院の恩師に推薦を受けたことを報告したところ、恩師ご自身が集中講義でその短大に出向いていたことが判明します。偶然は重なるものだとおもいました。そのようなわけで、盛岡への赴任が決まります。

しかし、問題がありました。大学院に在籍しながらの就職でした。国立大学では、「二足の草鞋（わらじ）を履く」ことを許していませんでした。国立大学出身で占められていたその短大の教員から、大学院の退学を迫られました。しかし、1年間退学せずに在職していましたので、私に対する風当たりは強くなってしまいました。このことで、特に私に辛く当たってきた教授は仙台に、私は八王子に勤務先が変わりました。年月は流れ、出張先の新大阪のホテルで遭遇します。和やかに歓談したそのあとで、「あの時は御免」と謝罪してきました。かつての悪印象が消える瞬間でした。こんなことがあるなんて、人生の面白さを感じました。

東北新幹線がなかった時代でしたので、6・7時間乗車して、一週間に一度、千代田区の大学院に通い続けました。車中は、動く書斎となりました。食堂車も楽しみの一つでした。

岩手県立の短大に在職中には、有識者として、盛岡市住宅委員会の委員や講演を依頼されていました。また、学生部長として、学生の団交にも対応しました。そのころは、まだ学生運動が盛んでしたので、非常勤として「簿記論」を担当していた盛岡市所在の国立大学でも学生の主張を表示する「立て看板」が林立していましたし、多くの大学が荒れていました。

この盛岡時代に、私の研究対象も環境問題を視野に入れた会計学に範囲を広げていました。

#### Ⅳ. 本学着任の経緯

或る日、岩手県盛岡市所在の医科大学の教員2人と私の3人で創価大学を訪れる機会がありました。創価大学は、その当時の他大学と異なり、「立て看板」もゴミもなく綺麗な大学でした。大学当局が、学生も教員もしっかりと管理しているから整然としたキャンパスになっているのだとおもいました。そのような大学のスタッフになってしまったら、息が詰まって大変だろう

と、帰路の東北線車中、浅薄にも、一緒に訪れた3人共に頷きあっていました。創価大学の使命を悟るのは、その後のことです。

その創価大学訪問直後、創価大学の当時の学長代理の方から八王子に新設する短大への転籍のお電話を頂きました。その代理の方は、奇しくも大学時代の先輩でした。私が1年生のときに、メンバーが3人しかいない学内サークルの4年生の中心者だったのです。開学後、本学の初代事務長となるとは、大学時代に夢にもおもいませんでした。

さて、異動のお話を頂いたときに、真っ先に頭に浮かんだことは、管理され過ぎてるようにみえた大学の印象でした。そのスタッフになることに一抹の不安がありました。また、女子の短大であることにも抵抗を感じました。盛岡では男女共学の短大でした。女子だけというのは性分に合わないと思い込んでいました。お断りする心算でいましたものの、返事を考える時間を頂きました。その間に、お断りのダメ押しのため、恩師や同僚に種々相談しました。しかし、すべての相談相手から、予想に反して異動するよう勧められました。熟考しました。異動する決意を固める決定打は、創立者の存在でした。

本学への異動の判断が正しかったと実感するのは、創立者からプレゼントされたネッカチーフを誇らしげに巻いた一期生が、颯爽と入学式典会場に入場してきた瞬間です。眩し過ぎる一期生の姿に圧倒されました。

## V. 学びの道のこだわり

本学異動4年目に、オーストラリアのシドニー所在のニューサウスウェルズ大学に在外研究員として派遣して頂きました。その成果として「オーストラリアの付加価値会計」として、日本社会関連会計学会第3回大会で発表しました。

さらに、「企業会計と環境問題」として日本社会関連会計学会関東部会で発表。そこでは、環境問題が企業会計に及ぼす現代的意義を示すとともに、経営者の社会的管理思考を配慮して企業会計を再構築すべきであると論じました。

その他に、いくつかの論文・研究ノートなどもそれなりに書いてきました。しかし、すべて満足のいくものではありません。恥ずかしい限りです。



大学時代および大学院時代の恩師、お二人とも会計学を社会・経済との関連で解き明かそうとする点はおおよそ一致していました。当然のことながら、学者としてのこだわりはお二人は大きく異なっていました。

話は戻りますが、大学3・4年生にゼミ幹事であった私は、ゼミナール連合会主催のその当時盛んであった他大学のゼミ生との交流試合に参加することを提案しました。しかし、学部時代の恩師は、そのことに賛意を表しませんでした。大学時代には、そのようなパフォーマンスに興じることなく、じっくりと考える力を身につけるよう指導されました。

私が大学の教員になった後も、その恩師は、マスコミに取り込まれないように、また、教科書ライターにならないように、そして、学問の道に徹するよう言われ続けました。たとえ飲んで夜遅く帰宅したとしても、必ず机に向かうように心がけなさいと助言されました。研究向上を妨げるような仕事を引き受けないようにとも指南されました。

大学院時代の恩師は、研究学会の役員になることに積極的でした。海外の研究者との交流にも心血を注いでいました。有難かったのは、当時勉強に勤しむ場所がなかった大学院生に、ご自身の研究室を開放してくださったこと、また、海外の研究者や日本の研究者との交流ができるよう計らってくださったことです。そして、出版社を大事にすることも教えて頂きました。

## Ⅵ. 教育のこだわり

両恩師に学んだこと、それは、社会の動向を究める力、洞察力でした。

しかし、今日では、即戦力の養成を大学に求めています。「職業に結びつく知識や技能を高める実践的なプログラムを大学に設ける」との提言が、政府の教育再生実行会議からなされました（2015（H27）年3月4日）。それを受けて、文部科学省が公表した「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の在り方について（審議まとめ）」（2015（H27）年3月27日）でも、質の高い専門職業人を養成するため、実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の創設を提言しています。

アカデミックな教育課程に偏った大学の変革が迫られています。いわゆる実学重視の教育に大学が変わろうとしています。

今日の産業社会は、どんな状況にあるのでしょうか。AIの進展により今



まであった職業がなくなるともいわれています。雇用も流動化することでしょう。生涯にわたって同一の仕事をやり続けることができないかもしれません。そのため、キャリア・アップやキャリア変更を求められる場面も想定されています。そのような社会に対応できる人材の育成を教育機関が担うことになります。

しかし、単なる実学教育だけでは、科学技術の進展や産業構造の変化に対峙できないとおもいます。どのような場面に遭遇しても、それを乗り越える力、それこそが考える力に違いありません。社会がどのように変転していくかを究める力こそ大学教育に必要であると認識しています。短大において、実践力の養成のみならず思考力の養成もこれからも続けられんことを願っています。

## エピローグ

副題として、「明日（あした）に生きる花束を君に」と付けました。どんな花束か？それは、恥ずかしながらお話した私の愚かしい経験です。大学時代の決断の失敗は、自分の中で勝手に思い込んでいたことであり、あとからみると若気の至りの勘違いでした。全てにおいて意味ある出来事でした。

その大学に進学し、ゼミナールを選択したからこそ、学びの道の師に出会うことができました。苦労したフランス語を選択した故に、フランスの研究の道も開かれました。アナウンサーにはなれませんでした。が、教壇で話す機会を得ることができました。岩手県への就職も、本学への異動も、一本の糸で結ばれているようにおもえてなりません。

皆様には、もっともっと素敵で輝かしい人生が待っています。失敗を恐れずに自ら掲げた目標達成のために果敢に挑戦しましょう。100年といわれている長い人生の途上、失敗したとか負けてしまったなどの敗北感を味わい、思い悩むこともあるかとおもいます。しかし、聡明な皆様は、それをつぎのステップのチャンスとして、更なる山に向けて明るく爽やかに登攀すると信じています。

当初、女性だけの学生に接することに躊躇していた私ですが、「人間教育の光の城」の本学で素晴らしい皆さんと学び合えたことこそが、私の一生の宝です。光り輝く宝石のような瞳の皆様に最終講義を受けて頂きこれほどの喜び

はありません。本当に有難うございました。最後に、拙くて恐縮ですが、歌を聞いてください。私の宝物である皆様に、「'O sole mio（わたしの太陽）」を贈ります。

## マッシリアのピュティアスとトゥーレに 隠された謎 (2)

楠 田 直 樹

### 6. トゥーレに隠された謎

#### a) トゥーレ探索の継続から

プレッタニケから6日で、ピュティアスは有名な発見であるトゥーレに達したとストラボンに叙述されている<sup>(107)</sup>。横断は、地名がただラテン語で知覚されるのみのベッリスの島から行なわれていたが、その島はその地域では最大の島であったにもかかわらず知られていない (Timaios, fr.74 = Plin.NH 4.104)。恐らくストレイモイ、すなわちフェロー諸島の最大の島かあるいは本土、すなわちシェトランド諸島の最大の島だったろうと考えられる。しかし、文脈上はブリテンよりもスカンディナヴィアの島であり、ベッリスはピュティアスがトゥーレから戻ることのできた本土である可能性が強いはずである。その地名がトゥーレ Thule、タイル Tyle そしてラテン語でトゥーレ Thule として示される<sup>(108)</sup> トゥーレの研究は、ピュティアスの地理学上の問題であるというよりはむしろ曖昧模糊とした問題である。彼の航路に関するさまざまな断片の周囲に存在している普遍的な困難さに付加して、トゥーレはヘレニズム時代から現代に至る主要な地理的難問となっている<sup>(109)</sup>だけでなく、ローマ時代に始まる意義深い文化的な範例でもある<sup>(110)</sup>。まず恐らくウェルギリウスによって表現されていた、遠くにある地理的な眺望として決まり文句のようになった (Vergil. Georg.1.30)。ウェルギリウスとともに

に、有名な一節がアウグストゥスの権勢が広く行き渡った象徴的なものとして文化的覚醒の「究極のトゥーレ」に入ってきた。ただ、それはピュティアスに発見された場所とかなり曖昧な結びつきだけに終始していた<sup>(111)</sup>。セネカは、近代初期の探検行動へ鼓舞するような、かつ「新世界」という語句をも創設した『*Medea*』の著名な文節に隠喩として広げていった<sup>(112)</sup>。トゥーレは、とりあえず著名だったケルネの北方対置地点となり<sup>(113)</sup>、アンミアヌス・マルケッリヌスの時代まで遠方の地点とされ、地理的な連絡のない地点であった (*Ammianus Marcellinus* 18.6.1)。近現代では、その神秘的な名声は、ゲーテの『*トゥーレの王*』のような随筆の中で強調されてきた (*Goethe, Faust* 2759)。

ただこの文学的文言との並行性は、ピュティアスのいうトゥーレの再発見への一定の企図があったようである。すなわち、ローマ時代まで、ブリテン島の一部だと見做されていたし、ストラボンの二つの場所の連結によって強化されていた見解だが、かなり嘲笑されるものだった<sup>(114)</sup>としか言えない。後1世紀には、ウェスパシアヌス帝がそれを征服したとも語られており (*Silius Italicus* 3.597)、そしてのちに、ガイウス・ユリウス・アグリコラもその地に赴いた (*Tacitus, Agricola* 10.5) とされている。前6世紀には、プロコピウスはその地を好奇心から訪れたとされるが、全く語っていなかった<sup>(115)</sup>。明らかにこれらの「発見」されたトゥーレは、ピュティアスの旅とは全く関係のない、単に北方に遠く離れた場所だった。例えば、アグリコラはシェトランド諸島の一部であったと考えている。トゥーレ探索、なおかつ北方の陸塊を新たに発見する意図は、古代を通して継続されて行なわれていた。前8世紀初期には、アイルランドの僧侶たちがアイスランドかノルウェーかのいずれかにトゥーレを発見し、続く世紀には別のアイルランド人僧侶ディクイルは、自らの書物“*Liber de mensura orbis terrae*”に、彼の時代から30年ほど前か、あるいは後795年頃、僧侶の一団が6ヶ月間「トゥーレ」にどのように居住したのかを叙述していた。彼の叙述では、トゥーレとしてアイスランドを示唆していた<sup>(116)</sup>。

そのうえで、トゥーレは、レバノンのチュロス、あるいはペルシア湾の現在のバーレーンのチュロスのように類似した地名と混同されていることも事実である。このようにして、以前から保持していた限定的な地理的首尾一貫

性を失ってしまった。ルネサンス初期に至るまで、それがヨーロッパの探検者たちの西進運動の基本的な要素にもなっていた。例えば、コロンブスは、彼の時代までにはトゥーレと北極海との結びつきが不必要だった数多くの場所に位置づけられていた<sup>(117)</sup>けれども、1477年に「ティレ」を訪れ、その地から100リーグ西に航海したと語った<sup>(118)</sup>。1910年に、クヌート・ラスムッセンは、グリーンランドの土地固有の文化にその名を適用し<sup>(119)</sup>、1950年には極北トゥーレはその島の米軍空軍基地名になっている。トゥーレのこの継続的な進化はピュティアスとの関わりはほとんどないけれども、マッシリア人が現実的にどこまで航海していたのかを理解する中で、現代的なトゥーレ批評の困難さを示している<sup>(120)</sup>。

## b) ストラボンなどの叙述とトゥーレの遠さについて

トゥーレの遠さは、ストラボンの解釈では、ピュティアス以外の誰も叙述していなかったというふうに強調されていた。例えそれがブリテン島やアイルランド周辺の他の島々と類似しているものであったとしても (Strab.1.4.3)。エラトステネスからトゥーレに関する若干の情報を受け取っていたストラボンにとって、これはその場所の存在を拒絶する理由になった。彼の時代には、イェルネ (アイルランド) が最も北方の島だったと感じていた (Strab.2.1.13)。ストラボンは他の可能な解釈に全く無知であった。すなわち、トゥーレは、ブリテン島やアイルランド近辺の島嶼部に見つけられなかったので、なおかつピュティアスがそこまで達していた唯一の人物だったので、それ以外に述べることができなかった。事実、ストラボンはトゥーレがブリテン島の北6日のところにあったというピュティアスの言質をすでに報告していた。それは「ブレッタニケ周辺の小さな島々」の範疇に位置づけることのできないものだった。ストラボンはエラトステネスに続いて、トゥーレをポリュステネスと並行した11,500スタディオン北に位置づけていたが、実際にはポリュステネスと並行した9,000スタディオン足らずの北側であった。ここでいう並行とは、夏至の頃に16時間昼が長いところとして定義づけられていた。つまりストラボンが信じていたのは、ブリテン島の中心だった<sup>(121)</sup>。実際、北緯48°42'はバリのそれであり、その計算そのものに重大な疑義が生じてくる。スタディオンそのものの不確かな長さのせい、またストラボ

ンの数値が他の尺度からスタディオンの長さを縮小していたせい、正確な数値はかなり困難であることには間違いはない。ただ、11,500 スタディオン (6,900,000ft) は、1ft を最小値として見積もっても、2,000km を下回ることとはほとんどない。北緯 48°42' からこの距離は、アイスランドの中央部を通り過ぎて、グリーンランド中央部やナムソス近辺のノルウェー沿岸に達してしまう。ナムソスでは、沿岸部は何キロにもわたって北東に伸び、このさらに北東の大陸地点をピュティアスが見つけた陸地だと想像するのはむずかしい<sup>(122)</sup>。グリーンランド中央部はまた、かなり遠すぎる。このように、あらゆる指摘は、疑問の余地が残ってしまったとしても、あるいはその確実性はかなり疎遠なものであるけれども、トゥーレの位置としてアイスランドを示している<sup>(123)</sup> といえる。アイスランドはフェロー諸島からの視界にはめったに出てこない<sup>(124)</sup> ので、ピュティアスは北西方向に付加的な土地の報告を受けていた可能性がある。さらに、鳥の渡り通路が航路を示していたのではないか<sup>(125)</sup>。アイスランドに対する主要な論議は、ピュティアスが居住民を叙述し<sup>(126)</sup>、ただトゥーレに蜜蜂の存在を叙述していた（ただ正確ではないが）らしい時期にその地が放棄されていたはずである。これは一般的に現代以前のアイスランドには存在しなかったと信じられていた<sup>(127)</sup>。

トゥーレがアイスランドだったと仮定して、フェロー諸島に最も近い地点であるウェストラホーン（海拔 888m）に、ヴァイキングの世代と同様に、ピュティアスは恐らくその地に達していた。その荒々しさと著名な沿岸に、ウェストラホーンはそれでもなお傑出した地標であった。そのすぐ西側に、スカルド・フィヨルドがあり、そこに現代の港ホーフエンがあり、南岸にはめったにない港の一つであった。ピュティアスが上陸したのは恐らく、ここだったと考えられる。彼の情報提供者は、アイスランドをユニークなものにする火山と氷河の混成現象を観察するために南岸に沿って旅することを薦めたはずである。そこでは今日少なくとも氷河は海岸から数百 m 内陸にまでやってきて、その土地は、自然の驚異的な結果とともに、氷河の氷解を引き起こした火山噴火“jökulhlaup”として知られている現象によって殺伐さを繰り返していた。この地域での最近の噴火現象は 1995 年 9 月に生じていた。ピュティアスの科学的な観察と結論は、彼が南岸に沿って広範囲にわたって航行したが、恐らくこの不毛の地の何処にも留まることができなかったと力

強く示唆していた。そこで彼が示唆していたように、世界はまだ形成されていなかった (Strab.2.4.1)。事実、アイスランド南岸はホーフエンの西側何百 km もの間、港らしきものは何一つなかった<sup>(128)</sup>。

ウェストラホーンの東側は、海岸部が北へと曲がっているので、アイスランドの東側を標していた一連のフィヨルドになっている。3枚のローマ貨幣が発見されたのは、ウェストラホーンから直線距離で 50km 足らず離れたブラグダウェッリルにあるここだった<sup>(129)</sup>。セイデイス・フィヨルドは海岸からかなり離れており、現在のフェリーがフェロー諸島やヨーロッパと結んでいるところである。明らかに、これは、世界の他の部分と密接な関係を長らく保っていたアイスランドの地方であった。ピュティアスはこのようなフィヨルドを探検しようだが、彼がスコットランドやフェロー諸島ですで見えてきたものとほとんど大差がなく、恐らく余り彼の関心を誘うものではなかったように思える。彼はアイスランドが 1000 年以上ののちにやっと居住されるようになった場所だとは考えていなかった。それは北西部にあり、南東部と比べると荒廃した地域であった<sup>(130)</sup>。ただ、ピュティアスはアイスランド沿岸部のさほど有益ではない地域を探検しており、これは地球の形成初期の段階についての自らの科学的理論を発展させるのに役立ったと思われる。

### c) トゥーレの地理的位置について

この地域への上陸の困難さは、トゥーレそのものがその遠さや普通でない現象以上にピュティアスの関心を引くものではなかったことを意味している可能性が強い。ブレッタニケに長期間滞在したという証拠は何もない。トゥーレは夏には夜がなく、冬には昼間がない (Plin.NH 4.102; また 2.187; Kleomedes, Meteora 1.4.208-10; Martianus Capella 6.595)、そして北極海か夏の回帰線上にあった (Strab.2.5.8) とされる。長く続く昼間や夜間は北極圏上のものだと限定されないし、ピュティアスは太陽が夏になると継続的に見えるどこかにいたのではないだろうか。その可能性が高いといえる。長く続く北の夕闇は遠く南の空にまで影響を与えていた。しかしながら、太陽が数時間で消えてしまう「太陽の寝床」と呼ばれる場所は、ピュティアスからの稀な直接的引用句として引き合いに出されていた<sup>(131)</sup> 場所である。これは現実的な地名のように疑惑を響き渡らせている。真夏の真夜中に真の理由

を調べていくと、山脈あるいは尾根に行き着く<sup>(132)</sup>。もしピュティアスがこれをトゥーレで見たのなら、その場所としてアイスランドが有力になってくるのは間違いない。そこでは、山々は 2000m 以上の高さになっている。その南岸から、恐らくウェストラホーン地域の特別な場所が全くもって特別であるけれども、真夏の太陽が消えてしまうような山間に隠れた多くの場所が存在していたようである。他方、ノルウェーの海岸からだと、太陽は大洋に沈んでいく。

トゥーレに関する若干の情報はまた、ピュティアスとの正確な関連が不明瞭ではあるけれども、プトレマイオスはさまざまなローマ人たちがトゥーレの位置を示していたことを信じたのちに叙述していたので、彼の『地理書』にもトゥーレの記述は出てくる<sup>(133)</sup>。プトレマイオスにとって、それは実質的にずっと北方の場所であり、彼の叙述によれば、北緯 63° と同じだったと考えられる。オークニー諸島のずっと北方で、東西 2°40'、南北 35' の大きさの一つの島であったか、あるいは東西が南北の 5 倍ほどの島だった。昼の最長日は 20 時間にも及んだ。ただ、資料は混沌としている。一日の長さはかなり南側に位置しており、オークニー諸島の北側とは相容れない。それ自身はシェトランド諸島（ただ、一つの島ではない）を示唆している<sup>(134)</sup>が、形状（その大きさではないけれども）はアイスランドに近いものがある。現代的に考えれば、その混同は激しいものがある。

トゥーレはまた、氷海から一日南だった (πεπηγυία θάλαττα)<sup>(135)</sup>。ここで用いられている言語原則は、πηγνύμι からで、その根源的な意味は「はめる」(Cf. Homer, Iliad 13.442) らしいが、古典期までは「固める」とか「凍らせる」(Cf. Aischylos, Perians 496) を意味していた標準的なギリシア語単語である。「氷海」という節はスキタイの領土についてヘロドトスが用いていた (Herodot. 4.28)。このように、ピュティアスの用語の中では、この言葉は特殊用語的なものではなかった。彼の云う氷海は、北極海の浮氷群、すなわち冰山、あるいは凍結した入江か氷河だったはずである<sup>(136)</sup>。ヘロドトスから、ピュティアスはこのような現象が自ら見ることのなかったずっと北方に存在していたことを認知していたはずであり、その地域の情報提供者から報告を単に受け取っていたのかもしれない。その可能性が高いといわざるをえない。



氷海とは対照的に、海が煮えたぎっていた場所があった<sup>(137)</sup>。これは非常に解釈が困難な文節である。用語の意味合いとして、海が沸騰していたのか、呼吸していた（いずれも ζέω から）のか、生きていた（ζώ から）のかという理由から、解釈の困難さが垣間見られる。沸騰し、生きている海という観念は、長らく存在していた。前者はしばしば火山現象と結びつけられていた（Thera に関して、Strab.1.3.16）。もし海が呼吸しているものであれば、探検は形而上学的なものになるが、類似した観念が再び出てくることはなく、ピュティアスと古典期ギリシアの知的社会との間には別の結びつきが出てきたであろう（Aristot.Metaphysics 1.3; Strab.1.3.8; Pomponius Mela 3.2. Poseidonios, op.cit., pp.793-4; また、Pomponius Mela ed.Silberman, pp.247-8）。他方、沸騰した海はアイスランドの火山活動を想起させる。それは地中海における火山活動とある種類似したものさえあるような印象を与えるだろう。そして氷海と沸騰した海との間の対照は、大雑把に言って、アイスランドのユニークな特徴として、著名なものである。このように考えてくれば、アイスランド＝トゥーレという可能性はいやがうえにも高くなってくるのだが。

別の不思議な形而上学的概念は、トゥーレとの結びつきであり、恐らく活気溢れる大洋は、「海の肺」（πλεῦμονι θαλαττίῳ ἐοικός）であり、ピュティアスは自らが見たものとして報告していた（Polyb.34.5.13-4 [=Strab.2.4.1]）。これはまたアリストテレスの観念とも結びついていた<sup>(138)</sup>。トゥーレでは、陸地、海洋、空気はまだ分別されていなかったが、あらゆるものが浮遊し、あらゆるものが相互に結びついている海の肺のように渾然一体であった。それはさながら、形而上学の概念がギリシア知性主義のまさに始まりへ引き戻すようなものであった<sup>(139)</sup>。海洋相から沿岸海水の上昇と沈降へ、この謎めいた文節に関して多数の説明が寄せられている<sup>(140)</sup>。地球の現実的な形成過程と連結しているので、全く相反する「沸騰」と「凍結」の両方の可能性のある北洋に関する普通ではない特徴とも関連しているように思われる。このように、ピュティアスがこれを説明すべく科学的理論を構成しようとしたことを示し、活気溢れる海や地球の形成過程というアリストテレス的な観念で構築されていた<sup>(141)</sup>。アイスランド南岸との親近性は、このような理論の発芽を許していたともいえる。ここには、トゥーレの地理的位置として、アイ

スランドの存在ありきのように見えてしまうのだが。

ストラボン、ピュティアスの叙述を基礎として、トゥーレの簡単な民族誌学を保存していた (Strab.4.5.5)。野生の動植物はほとんどないか、あるいは存在すらしていないし、その地域の食物は、例えば野生の穀物の一般的な雑穀<sup>(142)</sup>、食用植物、果実や根茎のような基本的な植生だけだった。恐らく、十分とはいえない量ではあるが、他の穀物や蜂蜜や穀物から供給された飲み物があつたことは想像がつく。脱穀は絶えず雨が降るために屋内で行なわれなければならなかった<sup>(143)</sup>。植生にとってはほとんど無理な状態だったけれども、この経済活動は、単純な収穫に関して、居住空間と非居住空間との境界に位置していた。それ以外には取り立てていえる経済活動は蜜蜂の飼育くらいだったろう。その印象はほぼ生存水準維持のための生活であり、雑草を食していた青銅器時代のデンマークの社会を想起させるものだったろう<sup>(144)</sup>。ストラボンはトゥーレに共同体があつたとしているけれども、それこそが豊かな地中海からやってきた人がその貧弱な北方経済をどのように見ていたのかについての一般的な見解だったのだろう<sup>(145)</sup>。その裏には、トゥーレの地域と地中海地域との経済活動の格差が見て取れるものであつた。

現在のアイスランド訪問者は、島の独自性に注目せざるをえない。その島は地球上の他の何処にも存在していないような独自の現象を有しているからである。現代世界の旅行者には独特のもので、アイスランドの自然は古代地中海世界からの探検者にとっては信じられているものを越えた一風変わったものとして映っていただろう。活火山や氷河の活動は陸地の形成がピュティアスの時代とは異なっていることを意味しているけれども、基本的な陸地形成の特徴はほぼ同じであろう。ピュティアスにしろ 21 世紀の訪問者にしろ、まず最初の一撃的な印象は、アイスランドには樹木が見当たらないということであろう。何百 km<sup>2</sup> という視界の中には樹木が見当たらない。氷河と火山の現象は常に印象的であるが、アイスランドではそれらが同時に起こり、ヨクルサ氷河の川のように奇妙なコントラストを生み出している。その川はミウルダル氷河から外洋まで 20km ほど流れており、ときに氷を運び、溶岩から運ばれてくる硫黄の臭いのする河川である。アイスランドでは新たな土地が規則的に形成されている。南西沿岸沖のサートセイの島は 1963 年に出現し、最大 2.7km<sup>2</sup> に達した。植生が一年以内に始まり、2002 年まで

に 60 種が存在し、10 種の動物が存在している<sup>(146)</sup>。ピュティアスは、地球がトゥーレでまだ最終形に達していなかったと叙述したのは抜け目のない正確さだった。これは今日でもまだ形成過程であり、現代の訪問者は何も類似するものがなく、世界がまだ形成中である宇宙の惑星にいるような感覚に囚われるだろう。まさにアイスランドの自然は、トゥーレが他のどこでもない最大の証拠である。

#### d) ピュティアスの旅程の最後について

ピュティアスは、トゥーレから、旅程の最後の部分を始め、バルト海に向かう<sup>(147)</sup>。面白いことに、ストラボンはこの最終旅程に関する資料を持ち合わせていない。ただ、ピュティアスがライン川を越えてスキタイに向かったことを認識していただけであった<sup>(148)</sup>。蓋然的には、ピュティアスの時代というよりもストラボンの時代にバルト海やスカンディナヴィアについてはほとんど何も知られていなかったのも、ストラボンは、ピュティアスに異論を唱えて付加的な年代を与えなかった。それで、自ら信用できないテーマを続けることができなかったと考えられる。ストラボンは、サルマティア部族の一派とされるロクソラノイと呼称される民族を通してトゥーレとスキタイとの間の結びつきを密にしていた。その民族は、想像するに最も遠方の人々だった (Strab.2.5.7, 7.2.4, 7.3.17; Diehl, E., “Roxolani”, RE Supp.7, 1940, col.1195-7. Cf.Plin.NH 4.80; Ptol.3.5.19; 24f.; Syll3.709; Tac.Hist.1.79f., 3.24; SHA Hadr.6.8, Aur.22.1f., Tyr.Trig.10.1f., Aurel.33.4; Aur.Vict. Caes.332; Eutr.9.8.1; Get.74f.; Iord.Get.74. Πωξολανοί と綴られている)。しかし、ロクソラノイは、黒海北岸に居住していたので、距離的に特に遠いというわけではなかった。それで、ストラボンはトゥーレをずっと遠方に見ていたピュティアスの叙述を拒絶するのみで、そこに彼らを含んでいたと考えられる。

ライン川河口を越えたピュティアスの旅の主要資料は、プリニウスに残存している。それにポンポニウス・メラが補足したものである。プリニウスの材料は、ティマイオスから転用されたらしい<sup>(149)</sup>が、自らの時代を含んで幾世紀もの時代の材料を混合しており、そこにピュティアスがどのように貢献していたのかは不確かである<sup>(150)</sup>。地名表はその経路を示していたとされ

ている。例えば、Berrice、“ex qua in Tylen navigetur”、Bergos、Dumna、Scandia などである。そのうち、Berrice はフェロー諸島かシェトランド諸島に位置づけられるか、あるいはノルウェー本土に位置づけられる<sup>(151)</sup>と見ている。また、Bergos はノルウェー沿岸を示唆している<sup>(152)</sup>。Dumna はアウターヘブリディーズ諸島のルイス島かハリス島だと信じられている<sup>(153)</sup>。Scandia はスウェーデン沿岸に位置しているようだ。例えば、現代の町 Skanör がスウェーデンの南西端にあるのだが。こうした地名はとりわけ地理的に定められるけれども、アイスランドとバルト海との間の経路については全く用をなしていない。すなわち、ローマ人たちにとっては、全くと言っていいほどに未知の地域であり、その地名一つ一つが正確なものなのかどうかは疑問の余地が大いに残っている。ここに、ピュティアスの経路を確定していくためには、史料の欠如が大きな問題として横たわっていることに気がざるをえない。

バルト海に関するピュティアスの地名は、Sinus Codanus、あるいは Kodanos だったと思われる、最も重要なスカティナヴィアという島々で満たされていたと叙述していた<sup>(154)</sup>。彼がこの地域に接近したときに、6000 スタディオンの大きさをもつメトゥオニスと呼称される大洋の広い河口にやってきた。その海岸にはグイオーネスという人々が居住していた。その人々はプリニウスによってゲルマン人とされたが、恐らくは時代錯誤的なイメージであろう。その河口から、1日の航行でアバルスという島に着いた。その島は琥珀の資源を有し、地域的には燃料として、近隣住民には売買するという両方の価値で使用されていた<sup>(155)</sup>。その島はまた、バシリア（「王国」）と呼ばれ、恐らくは地理的というよりも社会的に通常用語として使用されていた<sup>(156)</sup>。別名バルキアは、恐らく「バルト」と結びついていて、バシリアはスキタイ沿岸から3日の行程にあり、プリニウスのラテン語で *mare pigrum* という流れのない海の近くで、単にプリニウスが用語をラテン語化しただけのようではあるが、トゥーレ付近の凍結した海とは地理的にも言語的にもさほど異なっていないように思われる<sup>(157)</sup>。その海は、北方では多くの点で異なり、表面的には非連結的な土地、すなわち島嶼部で凍結していたようだ。プリニウスは他の無数の地名をあげて、一般的には若干の資料の中でデータの正確な分布がはっきりしない。それにもかかわらず、グイオーネ

ス同様に、メトゥオーネスも知られていないが、恐らくスイオーネスと同族であり、流れのない海付近に居住していたのであろう<sup>(158)</sup>。もしこれが事実であれば、ピュティアス、あるいは少なくとも彼の情報源がバルト海東部の内陸地帯にまで達していたことになる。恐らくは、フィンランド湾岸域にまで<sup>(159)</sup>広がっていたと考えられる。プリニウスの資料混合には十分に注意を払って、それは度外視しても、ピュティアスが、とりわけ広大なサエヴォ山系を含んで、スカティナヴィアや多様な民族集団、地理についての幾つかの説明用の資料になっていた<sup>(160)</sup>といえる。また、ヴィストラ川が引用されており、ポンポニウス・メラはそれを信じていたのだが、イステル川（ドナウ川）へと流れ込み、その沿岸には原始的な遊牧民が居住していたようである。

ピュティアスの旅程のこの部分の関わりは、琥珀取引にあった<sup>(161)</sup>。しかしながら、プリニウスは、琥珀産地に関するより多くの同時代的な情報を抱えており、とりわけドナウ川からの大陸間経路に関しては、プリニウスの時代に探検されていたという事実が残っている。ローマの時代にこの地域の一時的な関心事は、地名のラテン語化のように、混同されていた産物であった。しかし、意義深いことに、バシリアに関するプリニウスの文節は、左岸を維持しながらガデスのずっと北方まで行くことのできた人の告白とともに導入していたという点である。それは少なくともピュティアスを取り巻く環境内で、それに対する若干の説明を継ぎ接ぎして使用していたと考えられる。ポンポニウス・メラのヴィストゥラやイステルの結びつきは、アルゴ探検隊の旅程の調子で、いかにも類似している。メトゥオニスの入江は、長さ1000km以上あるのだが、不思議といかなる河口もないけれども、バルト海への最初の入り口になっている。無数のデンマークの島々は、これが大きな入江であったという印象を強くしていた。特にピュティアスがスカッゲラークを通過してデンマークの北端を周回することなくして、ヴェンデュッセルからその北へとユトランドを分かって、覆い隠されていたリムフィヨルドを通ったのち、ヴァイキングが使用していた経路を追隨していたとしても<sup>(162)</sup>。恐らく直線的な6000スタディオンはなく、その距離の実部分的な部分として、公海は避けられていたというのが一般的な考えではないだろうか<sup>(163)</sup>。

ヴィストゥラを除いて、ピュティアスの航海のこの最後の部分の地名は、正確には位置づけられないのだが、例えばアプルス/バシリアはゴットラン

ドのようなバルト海の島々の一つであるか、あるいはスカンディナヴィアか東ヨーロッパ本土かもしれない<sup>(164)</sup>。最低限に過小評価した見解は、メトウオニスの入江をアルビス（エルベ）川に位置づけ、同様にアバルスをヘルゴランドに位置づけているが、これは6000スタディオンの採用を拒絶することを要求している<sup>(165)</sup>に他ならない。イステル商業経路としてのヴィストゥラの引用は、ピュティアスのものであろうがなかろうが、あるいはそれを認識していたかどうか、などを別としても、利用していたと判断できる。また、バルト海内部の環境もそこで提供されていた。情報そのものは口頭で獲得されていた可能性が高いものなので、ただピュティアスがデンマークの島嶼部を越えて航行したのか、あるいはオデル川河口を越えていたのかを証明する情報ではない。ただし、彼はヘラクレスの柱に対する「北の柱」という地名にはその責任を負っている。ただし、その地名は幾つかの資料に見える。その最も早い時期のものは、『ニコメデス王に捧げられた航海』であり、のちにはタキトゥスにも叙述される。それに関するタキトゥスの注意力は、ほとんどないに等しいものである<sup>(166)</sup>。その位置づけは、高度な特殊性によっており、一般的にはバルト海沿岸の平らな地質を与えているが、蓋然的にはバルト海の知覚できる入口であり、恐らくコペンハーゲン南部に広がっているオーレストンであろうと推定できる。

その後に生じたことは全く知られていない。ピュティアスは、プリニウスが示唆している(Pl.NH 4.94)ように、ガデスへの海岸沿いに戻っていったのか、あるいはストラボンやポンポニウス・メラによってヒントを与えられた<sup>(167)</sup>ように、黒海方面へかなりの内陸部旅行をしていたかの二者択一的な行動を取っていたはずである。ヴィテプスクで、ドヴィナ川はリガ湾に注ぎ、ドニエプルから100km足らずである。この経路は9世紀初期にはロシアやアラブの商人には都合のいいものであった<sup>(168)</sup>。ただ、それ以外の経路が存在していた可能性は捨てきれない。ヴィストゥラの資料はドニエスデル川とモラヴァの付近のものであり、ドヴィナ川がヴォルガ川に接近していた。

ピュティアスが故郷に戻ってからさらなる遠方への旅行の示唆がある(Strab.2.4.1)。明らかに彼は自らの発見を公刊することができた<sup>(169)</sup>。彼の帰還から一世代も経たない間に、世界が後アレクサンドロスの現実に対処しようとして苦悶しているときに、ピュティアスの考えは、のちのヘレニズム時代

の地図作成学や天文学の探究にとって意義深い資料<sup>(170)</sup>として、ギリシアの科学的地理的考えの主流の中で行き渡っていった。なるほど、彼の探検航海は、アルゴ探検隊と比べられてきた<sup>(171)</sup>し、世界に極北を知らせた最も学識のある人物だと見做されていた (Martianus Capella 6.609) ことは事実である。

### むすびにかえて

ピュティアスのヨーロッパ北方探検とトゥーレとの関わりについて、若干述べてきたけれども、その大部分は謎に包まれたままで、今後の研究にも依るが、なかなかその核心まで迫っていくことは困難である。例えば新たに関連のある資料が発見されれば、全く変わった見解が出てくることは当然のことながら可能性があるが、現実にはかなり難しいといわざるをえない。ただ、このピュティアス史料のようなものはまだまだ存在しており、それを現実的な研究と近づけていくことは大切なことではないだろうか。明確に疑問に答えることは現在の段階では不可能に近いものがあるが、さまざまな分野での研究が進展していく中で、絡まっていた糸が解きほぐされるように一つ、また一つと解明されるところは出てくるはずである。

このような研究から、次の段階へと繋がり、さらに古代世界に曙光が差し込み、新たな展開を見せていく一助になれば幸いである。ただ、今回は先達の研究者のさまざまな見解をまとめて発表したに過ぎないが、それでも今後の研究進展に何がしかの支えになれば、それに越したことはない。その中で、とりわけ参考にしたのは、以下の研究である。

Cary, M. & Warmington, E. H., *The Ancient Explorers*, rev.ed., Baltimore, 1963.

Cunliffe, B., *The Ancient Celts*, Oxford, 1997.

Id., *The Extraordinary Voyage of Pytheas the Greek*, London, 2001.

Gsell, S., *Histoire ancienne de l'Afrique du Nord*, 8 vols., Paris, 1914-28.

Hawkes, C. F. C., *Pytheas: Europe and the Greek Explorers*, n.d., n.p.

Roller, D. W., *Through the Pillars of Herakles: Greco-Roman Exploration of the Atlantic*, NY & London, 2006.



Roseman, C. H., ed., *Pytheas: On the Ocean*, Chicago, 1994.

Bianchetti, S., ed., *Pitea di Massilia: L'Oceano*, Pisa, 1998.

また、ピュティアス自身の叙述に関しては、

Mette, H. J., ed., *Pytheas von Massalia*, Berlin, 1952.

Stichtenoth, D., ed., *Ueber das Weltmeer*, Köln, 1959.

Roseman, C. H., ed., *On the Ocean*, Chicago, 1994.

Bianchetti, S., ed., *L'Oceano*, Pisa, 1998.

があり、そのうちの Roseman 版を中心に当論考を考察していった。さらに、1990 年代以降の近年のピュティアス関連の研究については、

Batty, R., “Mela’s Phoenician Geography”, *JRS* 90, 2000, pp.70-94.

Bianchetti, S., “Pitea e la scoperta di Thule”, *Sileno* 19, 1993, pp.9-24.

Id., “Plinio e la descrizione dell’Oceano settentrionale in Pitea di Marsiglia”, *OT* 2, 1996, pp.73-84.

Id., “Per la datazione del Περὶ ὠκεανοῦ di Pitea di Massalia”, *Sileno* 23, 1997, pp.73-84.

Id., “Pitea di Massalia e l’estremo occidente”, *Hesperia* 10, 2000, pp.129-137.

Id., “Eutimene e Pitea di Massalia: geografia e storiografia”, Vottuone, R., ed., *Storici greci d’Occidente*, Bologna, 2002, pp.439-485.

Magnani, S., “Una geografia fantastica? Pitea di Massalia e l’immaginario greco”, *RivStorAnt* 32-3, 1992-3, pp.25-42.

Id., “Le isole occidentali e l’itinerario piteano”, *Sileno* 21, 1995, pp.83-102.

Id., “Da Massalia a Thule: annotazioni etnografiche piteane”, Aloni, A. & de Finis, L., ed., *Dall’Indo a Thule: i Greci, i Romani, gli altri*, Trento, 1996, pp.337-352.

Id., *Il viaggio di Pitea sull’Oceano*, Bologna, 2003.

Nesselrath, H.-G., “Pytheas”, *RGA* 23, 2003, pp.617-620.

などの論考があるが、1990 年代以前から、さほど研究が進展しているとは思えない。ただ、人々から忘れ去られることのないように、研究が続けら



れていることには途轍もない関心を抱かせるものである。そしてピュティアス以外のハンノやアウイエヌスにまでその範囲を広げれば、かなりの研究成果が残っており、そこにストラボンやポンポニウス・メラなどの叙述を含めれば、地中海外への航行に予想外の関心を持っていたことが明白である。すなわち、歴史上の大航海時代以前の紀元前の時代に、人類はすでに『大航海時代』を経験していたのではないかという推論が真実味を帯びてくる。その意味でも、ピュティアスなどの古代の航海者に関する研究は重要性を帯びてくるように思える。その際に、基本的に参照するのは、Cary, M. & Warmington, E. H., *The Ancient Explorers, Balti-More*, 1963(rev.ed.) である。地中海から遠方への旅行や探検に関して、地域ごとに概説して、古代にもさまざまな地域への関心があったことを物語り、示唆している。暗に、古代における「大航海時代」を仄めかしているようである。そして Cunliffe, B., *The Extra-ordinary Voyage of Pytheas the Greek*, London, 2001. へと続き、古代における航海に若干の示唆を想定している。このような仮説が信憑性をもってくるのかどうか、これからの研究如何に係ってくることはいうまでもないところである。

## 註

- (107) Strab.1.4.2. 恐らくエラトステネスから；また、Plin.NH 2.186-7 も見よ。ピュティアスが実際トゥーレを訪れたのかどうか、あるいは単にそれを聞き及んだだけだったのかどうかは、現代の研究者の間で論じられており、恐らく不必要な枝葉末節的な議論がなされている。ストラボン (2.4.1) は、トゥーレに関する短絡的な報告 (προσωπολήφαντος) のあるブリテン島でのピュティアスの旅を対比しているようだが、「近づいていないが知覚されていた」のがトゥーレについての実存的な考えに合致していたけれども、そのような距離感を生み出していたことは案外正確だったようだ (Romm. Edges, pp.157-8)。トゥーレに関する広汎な資料は彼がそこに達していたことを推測させるに十分であり、さらにクレオメデス (Metēora 1.4.208-10) は、伝承がピュティアスをしてその地を訪問していたことを言外的に叙述していた。ピュティアスとトゥーレについては、Hennig, R., *Von rätselhaften Ländern*, Munich, 1925, pp.95-138; MacDonald, G., "Thule oder Thyle", RE 2, ser.11, 1936, coll.627-30; Gisinger, op.cit., pp.332-44; Pytheas, ed.Bianchetti, pp.150-95; Whitaker, I., "The Problem of Pytheas"

- Thule”, CJ 77, 1981-2, pp.148-64 を見よ。後者には資料のあらましが記述されている。
- (108) ただし、ギリシア語表記の地名は残存している。地名に関する長らく、実りのない語源学的な議論については、De Anna, L., *Thule: le fonti e le tradizioni*, Rimini, 1998, pp.9-11 を見よ。
- (109) ピュティアスへのストラボンの不満の一つは、彼以後誰もトゥーレを見たものがないことである (1.4.3)。ストラボンの時代には、ブリテン島まで確実に近づいており、数年後に、Pomponius Mela(3.57) はバルト海にトゥーレを位置づけていたらしい (Parroni, P., “Surviving Sources of the Classical Geographers Though Late Antiquity and the Medieval Period”, *Arctic* 37, 1984, p.356 を見よ)。
- (110) トゥーレに関する発展的な態度について、Mund-Dopchie, M., “La survie littéraire de la Thulé de Pythéas”, *AntCl* 59, 1990, pp.79-97 を見よ。女史はウェルギリウスからウンベルト・エーコまでの名前の文学的使用を引用している。また、Borzsák, I., “Ultimus Thules”, *AAntHung* 41, 2001, pp.217-24 も参照せよ。
- (111) 究極のトゥーレやその文化的意義については、Romm, op.cit., pp.121-71 を見よ。
- (112) Seneca, *Medea*, 363-379 (“novus orbis”). 彼の考えは、「別世界」 (“*alius orbis*”: *Suasoria* 1.1) について叙述していた父親に鼓舞されていたようだ。
- (113) Clarke, K., *Between Geography and History: Hellenistic Constructions of the Roman World*, Oxford, 1999, pp.24-5.
- (114) Strab.1.4.3; Wijsman, W., “Thule Applied to Britain”, *Latomus* 57, 1998, pp.318-23 を見よ。
- (115) Prokopios, *History of the Wars* 6.15. 彼の人口過多や文化生活についての詳細な叙述は、恐らくスカンディナヴィアを意味していると指摘される。
- (116) Dicuil 7.7-13; Tierney 版、p.115 を見よ。Karlsson, G., *The History of Iceland*, Minneapolis, 2000, pp.9-10 も見よ。Dicuil に関しては、Bergmann, W., “Dicuil”, *TTEMA*, pp.151-2 を見よ。
- (117) 20 世紀初期に、トゥーレの場所の一つは、北極海よりもコロンブスが関心を抱いていた地域にあって直接的には地中海の西側だった。Cassidy, V. H., “The Voyage of an Island”, *Speculum* 38, 1963, p.601 を見よ。ただし、コロンブスの報告は、北緯 73° に「ティレ」を設定し、「ある人 [ プトレマイオス ] たちが確言していた 63° ではない」、それでアイスランドの緯度をさらに北側の地点に置換し、本質的にヤン・マイエン島に位置づけしている。その島は、信憑性は薄

いけれども、トゥーレの可能な場所として示唆されていた。ヤン・マイエン島は総体的に古代や中世の知識の外側にあったように思われる。17世紀初期にその島は発見された。この係争点はコロンブスの生涯初期の多くの神秘性の一つとして残っている。

- (118) C lon, F., *The Life of the Admiral Christopher Colombus*, E. T. Keen, B., New Brunswick, N. J., 1959, p.11; Stefansson, op.cit., pp.109-222; De Anna, op.cit., pp.31-45.
- (119) Rasmussen, K., *Greenland By the Polar Sea*, E. T. Kenney, A. & R., London, 1921.
- (120) この進化については、Cassidy, op.cit., pp.595-602 を見よ。
- (121) 並行の計算は、Hipparchos, *Geography*, fr.57 = Strab.2.5.42 からである。また、Strab.1.4.4; Plin.NH 6.2.19; Dicks, op.cit., pp.184-5 を見よ。
- (122) ノルウェーを支持するかなり威勢のいい議論は、国家的先入観がなくはないけれども、Nansen, op.cit., vol.1, pp.43-73 のものである。彼はその係争点に唯一の見通しというべきものをもたらししていた。ピュティアスのように、彼は人文主義者、研究者、探検家のめったにない結びつきをもった人物であり、ピュティアスのように、暫くの間極北を旅したヨーロッパ人となった荣誉に浸っていた。彼はピュティアスを非常に尊敬しており、「歴史上知られている単独旅行者のうち、このように北遠まで旅行し、重要な発見をした人物はいない」と叙述した (vol.1, p.73)。また、Loposzko, T., “Ultima Thule – P łnocne krańce świata”, *Meander* 30, 1975, pp.292-304 も見よ。
- (123) フェロー諸島も示唆されているが、まだかなり南方に位置していた (Dilke [supra n.52], p.136 を見よ。また、Hennig, vol.1, pp.166-71 の議論も見よ)。シェトランド諸島 (Dion, R., “L’esplorazione di Pitea nei mari del nord”, Prontera, F., ed., *Geografia e geografi nel mondo antico: guida storica e critica*, Rome, 1983, p.211) は、他の研究者と比べても、まだかなり南方に置いている。バルト海東部 (Pytheas, ed.Stichtenoth, p.30) は信じがたい。Bianchetti, S., “Pitea e la scoperta di Thule”, *Sileno* 19, 1993, pp.9-24 は、実際にはピュティアスについて叙述していた誰かが自らの理論を基にしていたけれども、可能性のある位置を約言している。アイスランドは緯度で 3  ちょっと (300km) 広がっており、計算上の曖昧さのゆえに斟酌を与えている。
- (124) Pytheas, ed.Roseman, p.107; Broche, op.cit., pp.150-1. 北極海の蜃気楼は、遠くの土地を浮き上がらせ、浮遊させるもので、またそうした役割を演じていたようである。2004 年夏に、Roller はアイスランド南岸沖 10km にあるウェストマ

ン諸島が空中に浮き上がり、二倍の大きさになっているのを見た。

- (125) Fawkes, op.cit., p.34; Cunliffe, op.cit., pp.119-20.
- (126) Strab. 4.5.5; Nansen, op.cit., vol.1, pp.54-5 を見よ。
- (127) Cary & Warmington, op.cit., p.52; この議論の弱点については、Broche, op.cit., pp.187-8 を見よ。
- (128) ホーフエンを越えて次の港は西側ほぼ 300km 辺りのボルラクスホーフエンにあった。最初にアメリカを視界に入れた Bjarni Herjolfsson が住んでいたのがここだった (Grænlendinga Saga 2-3)。この海岸はウェストマン諸島へのフェリーがボルラクスホーフエンの地から 60km ほど沿岸に沿って航行しなければならなかったほど近づきがたい場所であった。
- (129) 後 3 世紀後期の 3 枚の貨幣が発見された。この発見貨幣はそれぞれの間で 30 年以上のずれがあり後 270 年から後 305 年という範囲の中に納まっている。それ以外の古代ローマのものがこの島で発見された形跡は全くない。偶然にかなり遠方の貨幣が発見されたということを通して、ずっとのちの時代にその島に運ばれてきたという可能性があるけれども、その可能性と同様に後 3 世紀末、恐らく冒険家 Carausius の時代に単一船が南東部に上陸したとも考えられる。そして貨幣が奉納供物として置かれたという可能性もある。別の可能性として、ローマに仕えていたスカンディナヴィア人かサクソン人が貨幣を持ち帰ったことも考えられる。この発見は、新世界からの便宜的な発見物と比べてもかなり現実的に思える (Roller, op.cit., pp.54-5)。Haakon Shetelig, “Roman Coins Found in Iceland”, *Antiquity* 23, 1949, pp.161-3; Heichelheim, F. M., “Roman Coins From Iceland”, *Antiquity* 26, 1952, pp.43-5; Alonso-Nuñez, J. M., “A Note on Roman Coins Found in Iceland”, *OJA* 5, 1986, pp.121-2 を見よ。
- (130) Haywood, J., *The Penguin Historical Atlas of the Vikings*, London, 1995, p.93.
- (131) όπου ο ήλιος κοιμάται (Geminus, *Introduction to Phenomena* 6.9)、あるいは η ήλιου κοίτη (Kosmas *Indikopleustes*, *Christian Topography* 2.80.6-9)。また、Pomponius Mela 3.57 を見よ。
- (132) 後 795 年頃アイスランドのアイランド僧は現実にはそのような場所を見ていた (Dicuil 7.11)。
- (133) Ptolem., *Geography* 1.24; 2.3.31-32; 6.16.1; 7.5.12; 8.3.3。プトレマイオスに利用された自家撞着的な年代の類似性に関しては、Aujac, G., “L’île de Thulé, de Pythéas à Ptolémée” Pelletier, M., ed., *Géographie du monde au Moyen Âge et à la Renaissance*, Paris, 1989, pp.181-90 を見よ。
- (134) Carpenter, op.cit., pp.182-3.

- (135) Strab.1.4.2; Plin.NH 4.104 (“mare concretum”); また 37.35 も見よ; さらに、Murphy, T., *Pliny the Elder’s Natural History: The Empire in the Encyclopedia*, Oxford, 2004, pp.179-81 を見よ。
- (136) Nansen, op.cit., vol.1, p.67 は、その話題の何らかの知識を持って、ピュティアスが流水を見ることのできるほど遠くまでやってきていなかったと感じており、北極海の氷が減少していた時代に旅をしていたようだと見ている。これに関しては、Zubov, op.cit., p.71 を見よ。
- (137) Scholia to Apollonios of Rhodes, *Argonautika* 4.761-5a. その文節は、ピュティアスがリバリ諸島やヘファイストスの鍛冶場について叙述していたことを示しているが、これは標準的神話的な民間伝承で、実地視察の証拠は何もない。Broche, op.cit., pp.167-70、しかし Pytheas, ed.Bianchetti, pp.206-8 を見よ。
- (138) 言語はまた、純精神的な考えの反映である。Phaidon 111c-112e を見よ。
- (139) Romm, op.cit., pp.22-3. また、ピュティアスが中央アジアのステップ地帯に関するヘロドトスの叙述に影響されていたとの示唆については、Tierney, J., “Ptolemy’s Map of Scotland”, *JHS* 79, 1959, p.134 を見よ。
- (140) Pytheas, ed.Roseman, pp.127-31; Pytheas, ed.Mette, pp.7-8; Walbank op.cit., vol.3, pp.590-1; Cary & Warmington, op.cit., p.52; Thomson, op.cit., pp.148-9; Hawkes, op.cit., p.37 は、凍結した水の中で船舶が突き刺さったものとして見ていた。さながら海月のように流れており、その文節の別の定義であった (Plato, *Philebon* 10)。1783 年に、Reykjanestá — アイスランドの南西端 — の 70 マイル南西で潜水艦の通気孔が何百マイルにも渡って大洋を覆い、潜航していた軽石を噴射してしまった。Burton, R. F., *Ultima Thule: A Summer in Iceland*, London, 1875, p.6 を見よ。
- (141) ピュティアスの二つの観念は潮の満ち干を見たというタルソスのアテノドーロスの理論と共通している (Strab.3.5.7)。
- (142) Dalby, A., *Food in the Ancient World From A to Z*, London, 2003, pp.218-9.
- (143) 屋内脱穀の流れはフェロー諸島でまだ見られるはずである。そして例えばストックホルムのスカンセン人のようにスカンディナヴィア中で普通に形成されていた歴史的農場の集合体の中に多くの実例がある。
- (144) Kristiansen, K., “The Consumption of Wealth in Bronze Age Denmark. A Study in the Dynamics of Economic Processes in Tribal Societies”, Kristiansen, K. & Paludan-Müller, C., ed., *New Directions in Scandinavian Archaeology*, Odense, n.d., p.182; また, Cunliffe, supra n.37, pp.108-13 も見よ。
- (145) 別の北方民族学は、黒海の北側の人々 (Strab.7.3.18) について、ピュティアスカ

ら転用されたようだ (Aujac, op.cit., p.270)。

- (146) Weinman, E., "Life Takes Root", *Iceland Review* 41, 2003, pp.28-33.
- (147) バルト海に関する古代の知識の概観については、De Anna, L., *Conoscenza e imagine della Finlandia e del settentrione nella cultura classic-medievale*, Turku, 1988, pp.17-86 を見よ。
- (148) Strab.1.4.3. 「スキュティア」は極北東に関する一般的な用語で、必ずしもバルト海の北岸に限られる地域ではない。
- (149) Plin.NH 4.94, 104, 37.35-36 = Timaios, fr.74, 75; Pomponius Mela 3.33; Bianchetti, S., "Plinio e la descrizione dell'Oceano settentrionale in Pitea di Marsiglia", *OT* 2, 1996, pp.73-84.
- (150) ピュティアスの北方の地名については、Boschi Banfi, S., "Note sulle Tule", *NumAntCl* 5, 1976, pp.291-5 を見よ。
- (151) Pytheas, ed.Roseman, p.94; Stichtenoth, D., "Pytheas von Marseille, der Entdecker Mittel- und Nordeuropas", *Das Altertum* 7, 1961, pp.156-66.
- (152) Fabre, op.cit., p.41. 可能なノルウェーの地名のいくつかについては、Magnani, S., "Da Massilia a Thule: annotazioni etnografiche piteane", Aloni, A. & de Finis, L., eds., *Dall'Indo a Thule: i Greci, i Romani, gli altri*, Trento, 1996, p.342 を見よ。
- (153) Rivit & Smith, op.cit., p.342. もしそうならば、これは表中の諸地名の異常さを物語っている。
- (154) Plin.NH 4.96; Svennung, J., *Skandinavien bei Plinius und Ptolemaeus*, Uppsala, 1974, pp.49-51; De Anna, supra n.221, pp.33-7. Sinus Codanus については、Neumann, G. & Wenskus, R., "Codanus Sinus", *RGA* 5, 1984, pp.38-40.
- (155) Baunonia と呼称される琥珀島の言及は、海岸（いわゆるスキタイの沿岸）から1日の行程にあり、ティマイオス (fr 75a = Plin.NH 4.94) に引用されており、ピュティアスの叙述からのものであろう (Brown, op.cit., pp.25-6)。
- (156) しかしながら、その名は地方地名の型式からギリシア化されたものだろう。Krogman, W., "Die Bernsteininsel Basileia", *VII Congresso Internazionale di Science Onomastiche: Atti del Congresso e Memorie della sezione toponomastica* 2, Firenze, 1963, pp.205-20 を見よ。Krogman の主張は、地方名が Baswaleia であること、それが現在の Helgoland であることという二つのことであった。確かにその可能性は残っているが、明らかにバルト海上の島の位置と一致しない。

- (157) このような多重的な地名は、琥珀産地の多様性を反映しているようだ。一箇所に限定されるものではなく、バルト海中に現出し、あるいは現出していた。プリニウスの資料はヘカタイオス（ほぼ正確にはアブデラ出身 [FGrHist #264, fr.12]）で、彼の情報は恐らくピュティアス、ランプサコスのクセノフォンやユリウス・クラウディウス朝時代のあまり知られていなかった地理学者であるフィレモンという人物から転用されたものであったろう（彼については、Roller, op.cit., pp.122-3）。
- (158) Tac.Ger.44-5. その地名はオデル川河口の現在の Świnoujście を想起させる。
- (159) このような係争点に関しては、Pekkanen, T., *The Ethnic Origin of the ΔΟΥΟΣΗΟΡΟΙ*, *Arctos Supp.* 1, 1968, pp.33-9, 47-8 を見よ。
- (160) Plin.NH 4.96; Svennung, op.cit., pp.42-4 は、ノルウェー西岸の Siggjo と同一視しているが、Nansen, op.cit., vol.1, p.85 やごく近年の Reichert, H., “Saevo”, *RGA* 26, 2004, pp.86-8 を見よ。
- (161) Wenskus, R., “Pytheas und der Bernsteinhandel”, Düwel, K. et al., ed., *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor- und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel- und Nordeuropa*, vol.1, *AbbGött* 143, 1985, pp.84-108; De Anna, op.cit., pp.78-81. バルト海の琥珀の起源や分布の研究に関しては、Gisle Larsson, S., *Baltic Amber — A Palaeobiological Study*, Klampenborg, 1978, esp.26-40 を見よ。よく知られているバルト海の琥珀は、Kaliningrad の北西 Samland 半島出土のものである (esp.36) が、重要な貯蔵は今日ユトランドやスウェーデン南部で見られ、古代ではそれ以外のところにあったのだろう。
- (162) これらの海岸や海水域が何年にもわたって大きく変化していることを記憶にとどめておくことは重要であるけれども、Haywood, op.cit., p.23. ユトランド沿岸の大部分は古代には水面下にあった (Gripp, K., *Erdgeschichte von Schleswig-Holstein*, Neumünster, 1964, pp.278-307) し、このように Metuonis 入江の詳細は地理的に位置づけることはほとんど不可能である。
- (163) 6000 スタディオンの入江が Kattegat の北端からオデル川河口の折り返しまでのデンマーク島嶼周辺に存在するのは興味深くもまことしやかな示唆である (Hawkes, op.cit., p.9)。別の可能性は、デンマークの北端にある Skagens Odde からロシア国境にあたるポーランドの Kaliningrad 付近までの間である。そこでバルト海が北に折り返している (Aly, op.cit., pp.473-5)。
- (164) Pekkanen, op.cit., p.39; Wenskus, R. & Ranke, K., “Abalus”, *RGA* 1, 1973, pp.5-6. 別の見解は、Vendsyssel (Hawkes, op.cit., pp.9-10) である。また、Gisinger, op.cit., pp.349-51; Svennung, op.cit., pp.34-8 も見よ。

- (165) Cary & Warmington, op.cit., pp.53-4 も、Abalus/Basilia が Bornholm であると主張していた。
- (166) *Periplus Dedicated to King Nicomedes* 188-90; Tac. Ger.34. Pytheas, ed.Stichtenoth, pp.94-5 を見よ。ピュティアスも、Avienus, *Ora maritime* 336-74 がうわべではヘラクレスの柱について、北の柱に関する資料が類似していたことを主張している。*Periplus Dedicated to King Nicomedes* の文節に関しては、高度に変形されている（編者によって“locus desperatus”と叙述）のだが、Marcotte, D., ed., *Géographes grecs*, vol.1, Paris, 2000, pp.164-5 を見よ。もし Ephoros が資料であった（脚注 31 を参照）ならば、地名はピュティアス以前から知られており、彼をして鼓舞させていたのかもしれない。
- (167) Strab. 2.4.1; Pomponius Mela 3.33; Herrmann, J., “Volkstämme und ‘nordlicher Seeweg’ in der älteren Eisenzeit”, *ZfA* 19, 1985, pp.147-53.
- (168) Haywood, op.cit., pp.106-7.
- (169) 疑問は、彼の旅と結びついていた工芸品にはどんなものがあったのかというふう
- に生じてくる。2枚の貨幣がすでに Finistère と Devon からとして知られている (Roller, op.cit., p.119)。それらはピュティアスと同時代に年代づけられ、彼の経路の地理的位置づけの関心が生じる。貨幣はしばしば想像以上に意義が深くないが、それにもかかわらずこの2枚は初期のもので、前後とは孤立した関係になっている。恐らく、シェトランド諸島出土の考古学的証拠の方がより関心が深い。本土の Lerwick 付近の Clickhimin で、鉄器時代に割り込んできた居住者が農場を建設していた前6、5世紀頃のマッシリアの影響を受けていたと見られる土地固有のランプが出土している。この時期を通して、Clickhimin は、ピュティアスが叙述していたトゥーレと類似した文化水準に達しており、家内脱穀場を供えていた。Clickhimin をマッシリア人が訪問した場所の一つとして見るのは難しいことではない。恐らく延長した期間として。その場所に関しては、Hamilton, J. R. C., *Excavations at Clickhimin, Shetland*, Edinburgh, 1968, esp.pp.41, 45, 64-5, 79 を見よ。
- (170) Dilke, op.cit., p.182.
- (171) Scholia to Apollonios of Rhodes, 4.761-5a; Timaios, fr.85(=Diodoros 4.56); また、その含みに、Pomponius Mela 3.33. ロードス出身のアポローニオスへのピュティアスの影響の可能性に関しては、Dag Øistein Endsjø, “Placing the Unplaceable: The Making of Apollonios’ Argonautic Geography”, *GRBS* 38, 1997, p.381 を見よ。



# 文法学習でのアクティブラーニングを可能にする ディクトグロスの有効性

The effectiveness of dictogloss which enables students  
to learn grammar through active learning

山 本 成 代

## 1. 序論

アクティブラーニングを文法指導で実践するには、どのように行ったらいいだろうか。学生達が能動的に学び協同して学習を進めて行く姿は、教師が常に追いついていないものであろう。授業内で、コミュニケーション能力を育成する、会話を中心としたアクティビティでは、学生達を積極的に参加させるアクティブラーニング型授業を実践しやすい。ところが、文法学習ではアクティブラーニング型授業はなかなか取り入れづらい。学生達も文法学習の必然性を感じていながら、いざ教師の説明が始まると、思考を活性化することができず、受け身の授業となり集中しなくなってしまう。では、そういった学生達にどういった方法で、彼らの注意力を文法学習に向け、積極的に授業に参加させることができるだろうか。

筆者は、ディクトグロス (dictogloss; Wajnryb, 1990) という活動に注目し、これまでディクトグロスの有効性を様々な観点から研究してきた。また、それらを検証すべく多くのクラスでディクトグロスを実践し、それが学生達にどのような気づきを与えることができるか調査してきた。ディクトグロスは主にアウトプット活動を促す学習法であるが、それと共に、学生達に自発的に文法を考えさせるツールにもなると言えよう。ディクトグロスを行う過程

で、文章復元の段階で協同作業を行わせることにより、協同学習の利点が多く出てくる。ディクトグロス実施後に、毎回学生達に気づいたことや感想を記入してもらい、そのコメントを「気づき」のカテゴリーごとに分析してきた。本論では、これまで筆者が共同研究者と行った学生達の気づきの分析にも触れながら、ディクトグロスの有効性に言及する。また、ディクトグロスの理論的背景を、「協同学習」や文法学習の理論である「フォーカス・オン・フォーム」の点からも説明していく。

更に、本論では上記のようなディクトグロスの理論的背景ばかりでなく、アクティブラーニングの理論にも目をむける。一般的に「アクティブラーニング」と言われていることが、本質的には何を求めているのか探り、ディクトグロス実践との関連性を調べていく。授業内でディクトグロスをどのように活用しアクティブラーニングを実践できるのか、いくつかの例を挙げて説明する。最後に、これまでのディクトグロス実践の経験を活かして、より効果的な文法授業の展開方法について筆者なりの案を提示するつもりである。

## 2. ディクトグロスとは

ディクトグロス (dictogloss) は、Wajnryb (1990) が提唱した伝統的なディクテーションの技術を応用した言語教授方法のひとつである。村野井 (2006) は「ディクトグロスは、『比較的短く、内容の濃い (short & dense) まとまった文章を、教師が普通のスピードで数回読み、学習者はメモを取りながら聞く。聞き取ったことを基に、ペアまたはグループで協力してテキストを復元していく活動』と定義することができる (Kowal & Swain, 1994; Swain, 1998)」と述べている。ディクトグロスは、表面的には従来のディクテーションのようであるが、そのプロセスでは学習者に多くのことを要求する。まずリスニングをし、それに沿ってメモを取るという作業が入る。そのメモにしたがって学習者はグループで意味の通った文を復元するのだが、この段階で文法力や語彙力・記憶力など持てる力すべてを動員することになる。しかも、ここでペアまたはグループで協同して文を復元していくことで、学習者間に英文の構造や意味内容に関して多くの発話が生じることになる。

Wajnryb (1990, p.7) はディクトグロスの細かい手順を4段階で説明しており、それらを要約すると次のようになる。

### Stage 1. Preparation (準備段階)

- a. 教師は学習者が次の段階でリスニングしやすくなるように、トピックに關して学習者を巻き込みながらウォームアップを行う。
- b. これから読まれる英文の中に未習単語がないように、事前指導を行っておく。
- c. 今後のステージで何をやるか順を追って説明しておく。
- d. Dictation 開始前に学習者をグループに分けておく。

### Stage 2. Dictation (ディクテーション)

学習者は、普通のスピードで読まれた英文を2回聞く。1回目は全体を聞き、2回目にメモを取るように指導する。また、単語や語句のメモを取る際に、その後の復元作業時に思い出しやすいような単語をメモすることも説明に加える。

### Stage 3. Reconstruction (英文復元段階)

学習者は dictation が終わると、直ちにグループで個人の取ったメモを基に英文を復元する。読まれた英文とまったく同じにする必要はなく、文法や文脈のつながりを考えながら、グループ毎の英文を復元していく。グループ毎に筆記者を1人選出し、筆記者がグループの英文をまとめていくのが望ましい。

### Stage 4. Analysis and correction (分析・修正段階)

黒板に各グループの英文を書き、センテンスごとにそれらの英文をクラス全体でチェックしていく。学習者は、この段階でさまざまな復元英文を照らし合わせて、文法や語彙の点からディスカッションするように仕向けられる。理想的には、これらの復元英文がクラス全体で分析されるまで、学習者に元の英文を見せないことが望ましい。(山本 2011 より転載)

このように、ディクトグロスはリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの四技能にかかわる作業をひとつの課題の中で行わせることができる統合的学習法である。四技能とあえてここで言及したが、これは、グ

グループでの文章復元を目標言語で行った場合に必要とされるスピーキング力である。この文章復元を目標言語（この場合、英語）で行うか日本語で行うかは、筆者が様々なレベルの学生を対象にディクトグロスを行う際に使い分けてきた点である。学生のレベルが低い場合に、英語で共同の文章復元をさせても、ほとんど活発な発話が起こらないことが多い。ところが、中級以上のある程度話せる学生達には、英語で文法を説明する良い機会になり、スピーキング力を伸ばす練習となる。そのことに関して、以下に引用する。

この学習者間の発話に関しては、Swain (2005) が次のように「アウトプット仮説」(Output Hypothesis) の中で説明している。

アウトプット仮説とは、学習者が理解可能なアウトプットを産出するような機会を与えられることで、より言語習得が深まり正確な文法能力を伸ばすことができるというものである。アウトプットすることにより、自分がどこまでわかっていて、どこがわからないのかというギャップに気づき、ここで学習がおこるというものである。このアウトプットに関して、Swain (2005) は次の3つの機能に分類している。

- 1) The Noticing / Triggering Function (気づきを引き起こす機能)
- 2) The Hypothesis Testing Function (仮説を検証する機能)
- 3) The Metalinguistic (Reflective) Function (メタ言語機能)

この3番目のメタ言語機能が、本論で触れている協同対話に関するものである。これは学習者が言語の問題についてその目標言語を使用して会話をしながら発話する際に言語習得がおこると説明している。このとき生じる問題解決のための発話を Swain (2005, p. 478) は「協同対話」(collaborative dialogue) と呼んでいる。Nation (2007) は、ディクトグロスを、このメタ言語機能を発達させるための教室でのアクティビティとして紹介している。(山本、2011、p. 121)

復元時の話し合いを日本語で行っても、学生の目を文法機能に向かせるためには大変効果的である。学生達はグループで正しい文章を作り上げるために、言語形式や意味内容について必然的に話し合うようになる。学生の注意が特定の言語形式や文法に向いたところで、教師の方では文法説明を行うこ

とができる。この点に関しては、後述の「フォーカス・オン・フォーム」の項で詳しく述べたい。

村野井（2006）は、ディクトグロスのこの協同作業は「文章の復元なので、自然なコミュニケーションとはやや異なるが、学習者に自分の表現能力の限界を気づかせる上で有効なアウトプット活動である」と説明している。学習者はこの協同対話を通して、自分が復元しようとしている英文の文法に注意するようになり、文法上で自分がいったい何を理解していないか気づくことになる。ある程度、**fluency** を身につけた学習者なら、この段階で自分の「穴」に目を向けることができる。普段、あまり気にしないで発話していた英文の細部にわたって「気づき」がおこるのである。レベルがあまり高くない学習者が母語で協同対話を行った場合でも、対話者同士のメタ言語能力は刺激され、今まで注目していなかった文法に多くの気づきがおこり、学習効果は大きいと考えられる。ディクトグロス提唱者の Wajnryb（1990）も、「ディクトグロスの目標は、文章復元のタスクの中で生産的な文法を使用して、学習者に自分たちができることとできないことを理解させることであり、また他の学習者とのふれあいを通して文法習得をすることである」と述べている。

ディクトグロスは実際に授業で行ってみると、学生達が自然と動き出すことに目を見張るが、外国語習得理論からみても、理論的裏付けがしっかりとあることがわかる。染谷（2010）は、それらを以下のようにまとめている。

1. 学習者の自律的な言語学習を可能にする（**learner autonomy and self-motivated learning**）。
2. 言語学習を学習者の主体的な体験として組み立てることができる（**learning as active involvement/experience**）。
3. 個人学習と協同学習を適切に組み合わせることができる（**optimum combination of individual and cooperative/collaborative learning**）。
4. 学習者同士の交渉による学習効果が期待できる（**interaction hypothesis**）。
5. 意味に焦点をおいた学習（**focus on meaning**）と構造に焦点を当てた学習（**focus on form**）を並行して行うことができる。
6. 文法の学習を「必要なときに必要なだけ」（**grammar when needed and as**

much as needed; grammar in response to visible needs) という原則に沿って行わせることができる。

7. 目標言語と自らの中間言語とのギャップに気付き (noticing and consciousness raising)、主体的学習への動機付けが起こる契機を多く提供することができる (self-initiated motivation for further learning)。
8. 教師は学習者の自主的な学習を促進する役割に徹することができる (teacher as facilitator)。

更に、染谷 (2010) は、ディクトグロスの学習過程を以下のような「ディクトグロスの3段階モデル」として提示している。

- 1) Input Phase : テキストの提示と学習
- 2) Output Phase : メモ取り、およびメモに基づく原文復元作業 (ソロ、ペアまたはグループ)。
- 3) Confirmation Phase : 教師によるコメント。

この3段階モデルを考慮し、筆者は様々なレベルのクラスでディクトグロスを実施し、レベルに合わせてそれぞれの phase にかかる時間を変えていくことが適切であるという考えに至った。初級者には Input phase に時間をかけ、使用する語彙や文型など十分に学習した上で、ディクトグロス用の英文を聞かせる。例えば、ディクトグロスを行う英文を事前に音読したりシャドーイングしたりして、Output phase での作業の負担を軽減させる。一方、上級者クラスでは Input phase にはあまり時間をかけず、Output phase で、事前学習の助けなしで英文復元をすることにより、力を伸ばすことができる。このように、学習者のレベルに合わせて、費やす時間の調整や教材を変えることにより、ディクトグロスはどんなレベルのクラスでも使用することが可能である。

### 3. 協同学習

ディクトグロスの理論的裏付けについて、染谷（2010）が前章でまとめているように、ディクトグロスの文章復元段階でグループでの共同作業をすると、協同学習の効果が出てくる。Johnson, Johnson, and Holubee（1993, as cited in McCafferty, Jacobs, & Iddings, 2006, p. 3）は、協同学習を「学習者が自分や他のメンバーと一緒に作業をして、お互いに力を伸ばすことができる教育上のグループ活動のこと」と定義している。ディクトグロスは、個人が持ち寄ったリスニングメモに基づいてグループで完成した文を作り上げるというものであり、このプロセスで協同学習が多くおこると考えられる。一人では聞き取れなかった部分をお互いに補い合いながら完成していく過程で、他の仲間に自分が不確定な部分を聞いたり、また教え合ったりしながらタスクを遂行していくことができる。クラス全体では意見を控えがちな学生も、グループという少人数の中では自分のわからない部分をクラス全体にさらさなくて済むため、比較的リラックスして質問することができる。まさに、ディクトグロスのこの部分が、文法でのアクティブラーニング型授業を可能にしている大きな側面だと言える。個人での聞き取りによるメモを他のメンバーと共有して、元の英文に作り上げる作業は知識を外へアウトプットしていくことである。

Brown（2001, p. 178）も、「グループワークによって、暖かい思いやりのある雰囲気が生まれ、共通のゴールを目指してお互いに協力し合う一種の共同体ができあがる」と述べている。自分が守られているという安心感の中で、お互いに助け合い、自由に意見を言い合えるところが協同学習の利点のひとつだといえよう。村野井（2006）は、ディクトグロスを「「他の学習者と力を合わせて行う協同学習」であることから、内発的動機の柱である『関係性』を高める効果があると予測できる」と説明している。また、Jacobs and Goh（2007, p. 2）はグループ活動の理論的根拠の1つとして、Lantolf and Throne（2000）の説明している社会文化理論（The Sociocultural Theory）を挙げ、「学習者は自分ひとりで学習するより、協力することによって、人と人とのインタラクションによって、より多く学ぶことができるであろう」と言及している。

協同学習の大きな利点の1つは、そこで学習者間のインタラクションが

多く起こるということであろう。村野井（2006）は、「インタラクション（interaction）とは、言語を使って他の対話者と情報のやり取りなどの意思伝達をすることを意味する」と説明している。Long（1996 as cited in Jacobs & Goh, 2007）の「インタラクション仮説」（Interaction Hypothesis）は、学習者は他者との相互交流によって理解しやすいインプットを得ることができると述べている。ディクトグロスの文章復元プロセスでは、学習者が目標言語を使ってタスクを行えば、必然的に意味交渉が起こり学習者の発話量も増え、言語習得が促進され则认为られる。また、母語でのインタラクションであっても、協同学習の観点からみれば大いに価値あるものといえよう。インタラクションすることにより、受け身の文法授業から、参加する文法学習へと変わっていく。和泉（2009, p. 107）は、「インタラクションの役割は、コミュニケーションの問題を解決するための意味交渉に止まらず、様々な形で起こる学習者の相互協力も含んでいる。学習者がお互いにサポートし合っていて活動する中で、様々な知識が創出されていくとされるのである（collective construction of knowledge – Donato, 1994; R. Ellis, 2000; Lantolf, 2000; Lantolf & Throne, 2006）」と述べている。この説明にもあるように、ディクトグロスでは、文章復元という与えられたタスクを完了するためにグループ内の協力や知識の共有がおこり、協同学習が生じると考えられる。文章復元時の様々なグループ間の会話の中で、自分より聞き取れていた学生の発言から、文法事項を確認したり学習したりすることもある。まさにここでは、「足場作り」（scaffolding）と呼ばれている学習の補助的役割が、インタラクションで起こっていると言えよう。筆者の長年にわたるディクトグロス実践から、ディクトグロスが授業を活性化する要因として、この協同学習の利点を第一に挙げたい。

#### 4. フォーカス・オン・フォーム

文法学習の授業は、一般的に教師が文法の説明をするという形態が多い。この、文法説明に学生の興味関心を引き付け続けるためには、並大抵の技では効果がない。学生が興味を示してくるのは、「なぜここがこうなるのか？」という壁にぶち当たった一瞬だ。この一瞬を逃さずに、文法説明を行うことにより、学習者の中に文法解説がしみ込んでいくと言えよう。その考え方に



基づいているのが、ここで述べるフォーカス・オン・フォームである。前章では、ディクトグロスの有効性を協同学習と関連付けて述べたが、ここではフォーカス・オン・フォーム (Focus on Form = FonF) の観点から考察してみたい。Long (1997) の提唱したこの FonF という指導法は、学習者が意味に焦点をおいた言語活動をしているときに、特定の文法形式に注意を向けさせる方法である。これは、従来の伝統的教授法のように、文法項目をコミュニケーション活動と分けて教える方法とは大きく違っている。村野井 (2006) は、「内容ある事柄に関して第二言語学習者が目標言語を使用して意味ある活動を行い、その過程において文法習得を促すことが、フォーカス・オン・フォームのねらいである (Long, 1988a, 1991)」と説明している。学習者が言語産出をしようとしている時に自分のわからない言語形式に遭遇した場合、必然的に学習者の注意は意味から言語形式へとシフトされる。学習者の注意が言語形式へと移ったときに、その言語形式の文法を指導することが言語習得に効果的であるとしている。この理論から考えると、ディクトグロスでは、学習者は文章を復元する際に「意味」に注目しており、その復元段階では当然「言語形式」にも注意を払う。文法に注意しながら文を再構築していくわけであるから、学習者がつまづいた段階で、自分でその文法項目をなんらかの方法で調べたり教師が指導したりすれば、そこで言語習得がおこると考えられる。染谷 (2010, p. 36) は、現在の第二言語習得論の理論・理念からディクトグロスの利点を述べており、その中に、下記のように FonF に関するものもいくつか含まれている。(本論第2章にて既出)

- ・意味に焦点をおいた学習 (focus on meaning) と構造に焦点を当てた学習 (focus on form) を並行して行うことができる。
- ・文法の学習を「必要なときに必要なだけ」(grammar when needed and as much as needed; grammar in response to visible needs) という原則に沿って行わせることができる。
- ・目標言語と自らの中間言語とのギャップに気付き (noticing and consciousness raising)、主体的学習への動機付けが起る契機を多く提供することができる (self-initiated motivation for further learning)。

FonF は、学習者がコミュニケーション活動に従事している際に遭遇した文法項目を指導するわけだが、この場合、学習することになる文法項目は偶発的なもので、指導する文法項目が偏ってしまうことも考えられる。そういったことを考えると、教室で FonF 指導を取り入れるには、教師側の準備・工夫が必要となってくるであろう。この点に関して、Williams (2005) はもっと広げた FonF の定義を紹介しており、FonF 指導には「事前計画的」(planned) と「即応的」(spontaneous) の2つがあるとしている。さらに、前者には「先取り型」(proactive) と「反応型」(reactive) があるとしている。この2つの FonF 指導法について、和泉 (2009) は、「先取り型の FonF は、特定の言語形式が必然的に使われるようなコミュニケーション活動を前もって用意することによって、そこで FonF を行うことになる」「反応型の FonF では、前もってターゲットとする言語項目を特に設けずに、コミュニケーションの中で生じる問題に応じて何に焦点を当てるかを柔軟に決めていく」と説明している。

これらのことを考えると、ディクトグロスにおいて、学習者に聞かせる英文の中に、学習させたい目標となる文法項目を含むように準備しておけば、学習者が文の復元の段階で、必然的にその言語形式に注目することになり、自分がその文法項目を理解しているかいないかに気付くこととなるだろう。自分の「穴」に気付いた時点で、教師がフィードバックを与えていくことができる。第二言語習得理論研究の中ではさまざまな FonF のテクニックが提示されているが、それらのテクニックは、学習者の注意を言語形式に向ける方法から「明示的な注意の引き方」と「暗示的な注意の引き方」に分類されている。和泉 (2009) も、ディクトグロスを「明示的な注意の引き方」をするタスクとして紹介している。本論では、実際にディクトグロスというタスクを行いながら、学生たちがどのような文法への「気づき」を持ったかにも注目したい。

## 5. アクティブラーニングの観点から

英語教育、特に語学教育の点からみると、学生達を巻き込みながら一方通行ではない授業を組み立てるということは、ある意味、当たり前のことである。受動的な語学教育などあり得ない。学生達は受動的に講義を聞くのでは

なく、話したり、書いたり、聞いたりと行動を起こすように様々なアクティビティを行う。特に筆者は、これまで常にそのことを考えながら授業を行ってきた。「アクティブラーニング」という語句が教育界で盛んに取り上げられるようになってきた昨今、この「アクティブラーニング」という言葉は、これまでの筆者が行ってきた授業形態を表すのだろうか、と自問自答もしてきた。溝上（2014）はアクティブラーニングの定義を以下のように述べている。

「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」（p. 7）

つまり、活動をしながら、そこで生じる認知プロセスを外化することが重要になってくる。ただ活動だけ参加して、何も理解が伴っていない場合はアクティブラーニングとは言えない。例えば、英会話の表現を覚えても、それがどういう状況で使われどのような役割を果たすのか理解しなければ学習したとは言えないだろう。アクティブラーニングは、学習したことを、書く・話す・発表するなどを通して外化することだと、溝上（2014）は説明している。このことを考えると、外化する前にしっかり学習することが大事になってくる。つまり、アクティブラーニングと言っても、ただ単にアクティビティだけをやらせるのではなく、しっかり知識を与え、それらを外化して定着させることが望ましいと考えられる。このプロセスのメカニズムを、松下（2015）は、「いったん内化された知識は、問題解決のために使ったり人に話したり書いたりするなどの外化活動を通じて再構築され、より深い理解になっていく（内化が深まる）。」と説明している。

溝上（2014）は、アクティブラーニングが盛んになった背景には、教授学習パラダイムの転換があると述べている。「教える」から「学ぶ」へのパラダイムの転換は、筆者を含め英語教育者たちに、どのような授業形態がいいか模索させてきた。高等教育の大衆化で、多様なレベルの学生がいる中で、座学だけでは授業を成り立たせることが難しくなっていており、そういった

状況を踏まえて出てきた策でもある、と溝上は解説している。しかしながら、出発点は、そういったことへの対応策だったとしても、現在は、「卒業後の仕事や人生に適応していくための技能・態度（能力）を育てているか」という課題に対処するための学習パラダイムでもあるとも説明している（溝上、2014、p. 46）。溝上が解説するように、学生がしっかり講義を聴く大学であっても、それだけでは、アクティブラーニングから得られるような学習成果を得ることは難しいだろう。議論したり皆の前で発表したりするトレーニングがなされなければ、社会に出てから自分の能力を人に伝えるコミュニケーション力を身に付けることは容易ではない。実際に筆者が学生達を見ている、自分の意見や考えを的確に「人に伝える能力」を持っている学生は少ない。

アクティブラーニングの理論を詳しく見ていくと、筆者が自問自答してきた部分が多少なりとも明らかになってきた。溝上（2014）によると、これまでの「受動的学習」から「能動的な学習」への移行のために、教員から学生への知識の一方的な知識伝授型講義から双方向型講義へ乗り越えることは当たり前になっており、能動的授業において、いかにアクティブラーニングを行うかが重要になってきている、ということになる。つまり、ただ双方向型授業を行っても、その授業形態で、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成が図られなければ、真の意味でのアクティブラーニングと言えない。双方向的授業形態の中で、学生達がお互いに介入しながら知識・技能・態度（能力）を育成していけるものでなければならない。単に学生参加型授業を行っているだけで、自分はアクティブラーニングを行っていると思い込んではいならない。双方向的授業を行っている状態で、そこで認知プロセスをアクティブにさせるアクティビティが必要である。

この観点から見ると、本論で説明してきたディクトグロスは、文法学習のアクティブラーニングを可能にするツールと言えよう。学習した文法項目は、ディクトグロスという活動を通して外化され（協同学習）、更に自分が理解していない点が明らかになり、そこで学習することにより（フォーカス・オン・フォーム）、内化も深まっていく。文法学習において、学生達が自分たちで文法について考え、ディスカッションするアクティビティは数少なく、またあったとしても、会話練習との抱き合わせで行うものが多い。純粹に文

法項目のアクティブラーニングを行うものとして、ディクトグロスは大変使いやすいものと言えよう。それでは、実際にどのように授業の中で、ディクトグロスを組み入れているのかを次章で解説する。

## 6. ディクトグロスの実践

筆者と共同研究者は、これまで7年近くに亘って、いろいろなタイプのクラスでディクトグロスを実践してきた。以下、時系列に従って列挙する。

- 1) 英語通訳演習クラス（上級者：TOEFL ITP 480 以上）
- 2) International Program：英語集中クラス（中級者：TOEFL ITP 380-430  
[コース開始時]、480-500 [コース最終時]）
- 3) 一般英語クラス（初級者：TOEFL ITP 380-430）
- 4) 資格試験対策（TOEFL）クラス（初級者：TOEFL ITP 380-430）
- 5) Reading クラス（初級者：TOEIC IP 250-350）共同研究者担当クラス
- 6) English for Tourism：日本文化を簡単な英語で説明できる力をつける  
内容中心の授業（中級者：TOEIC 320-600）
- 7) 一般英語クラス（中級者、上級者：TOEIC 350-830）

このように多岐にわたるレベルでディクトグロスを実践してきたが、一樣に学生達はこの活動に積極的に参加したと言っていいだろう。細かい手順は、第2章（ディクトグロスとは）で詳しく述べているが、学生のレベルによって、Step 1 から Step 4 までの段階のどの部分に時間をかけるかがディクトグロス成功の鍵を握る。また、使用教材もレベルにあったものを、うまくディクトグロス用に調整していくことが必要である。本論では、ここ2年に亘ってディクトグロスを実践している English for Tourism のクラスについて詳細を述べる。

English for Tourism クラス（実践時：2016 年秋学期、2017 年秋学期、2018 年春学期）

- 使用教科書『日本のことを一分間英語で話してみる』（広瀬、2014）
- 内容に重きを置いた授業

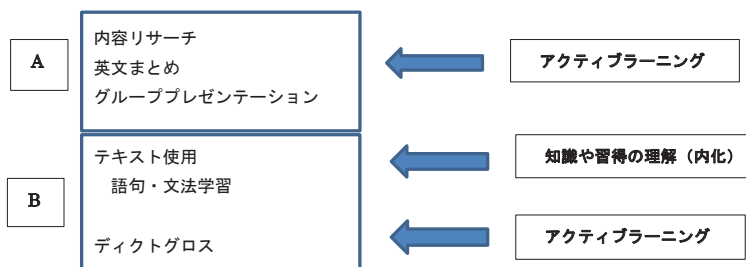
- ・目標「日本の文化を簡単な英語で伝える」
- ・教科書の内容に関した日本文化についての学習
- ・トピックについての十分な学習・知識
- ・各人が宿題としてトピックについてリサーチしてくる
- 英語力を伸ばす授業
  - ・トピックに関する簡単な会話練習
  - ・教科書のシャドーイング、リーディングを行う
  - ・教科書の文を使って、日本語から英語へ直す練習(英文の意味にも注目)

上記の授業形態の中で、「英語力を伸ばす授業」の面でディクトグロスを使用した。内容に重きを置く授業形態においては、学習者の英語力を伸ばすためにはどのようなアクティビティを行ったら効果的かしばしば迷うところではあるが、この授業では、日本文化をまとめた教科書を使用した。教科書の英文のシャドーイングや日本語から英語への転換など、細かい部分にも目を向けながら、文法指導の一環としてディクトグロスを実践した。このことは、前述(第2章)の染谷(2010)「ディクトグロスの3段階モデル」の理論に基づいている。最初の段階: **Input Phase** により多くの時間をかけ、その後、ディクトグロスを実践し、教科書で学習した内容(文法)が定着しているかどうかチェックした。また、しっかり理解していないようなら、**Conformation Phase** にも時間を割いた。内容に重きを置く授業で忘れられがちな「正確な文法力をつける」という点にも目を向けることができた。

前章でアクティブラーニングの観点からディクトグロスを考えてみたが、そのことを踏まえて、この授業でのディクトグロスの位置は、図1のようになる。

この授業形態では、ディクトグロスを行う前に十分にディクトグロスで使用する英文を学習しておき、ディクトグロスは理解度チェックの機能を持たせて使用する。多くの授業でのディクトグロスの取り入れ方を考えた時、この使い方がツールとして一番使いやすい。

図 1. English for Tourism 授業の組み立て



A: 内容に重きを置いた授業

B: 英語力を伸ばす授業

まず「A」を行い次に「B」に進む。

## 7. ディクトグロス実践における「気づき」の考察

筆者と共同研究者の研究のねらいは、ディクトグロスを行うことによって、学生達がどのような気づきを持つかということであった。2016年以前の研究では、ディクトグロスシートに書かれた学生のコメント分析により、この気づきを内容ごとに分類してきた。2012年の研究（山本・臼倉、2012）では、学生の感想の中に見られる「気づき」を概観して、以下の2つに大きく分類した。

### A. 自分自身の英語力に関する気づき（自己モニタータイプ）

①単語 ②スペリング ③文法 ④聞き取り

### B. ディクトグロスを成功させるための方略に関する気づき（ストラテジータイプ）

①メモの取り方 ②聞き方

Aタイプ（自己モニタータイプ）の気づきは、アウトプット仮説（Swain 2000, 2005）の中の「学習者が自分自身の英語知識の穴を見つけること」につながり、更には「現在の自分の能力で表現できることとできないことのギャップに気づく（noticing the gap）」きっかけになり得ると考える。染谷

(2010) はこのようなモニタリングのプロセスは、「自分の思考（の結果とプロセス）について思考するという意味で、「メタ認知的」なもので、自分の言語使用について考え、議論するという意味で「メタ言語的」なものである」と述べている (p. 39)。

また B タイプ（ストラテジータイプ）の気づきも同様にメタ認知ストラテジーの一部であると考えられる。Anderson (2002) によると、メタ認知ストラテジーには、(1) 学習の準備と計画、(2) 学習方略の選択と使用、(3) 学習経過のモニタリング、(4) 学習方略の調整、(5) 学習方略および学習成果の評価、の 5 つが含まれ、これらの過程は自律した学習者の育成とつながる。B タイプの気づきは、原文復元作業という学習活動をどのように成功させるかについての学習者の「気づき」であり、試行錯誤を繰り返す過程で、学習者はメタ認知ストラテジーを鍛えることができる。(山本・臼倉 2012 より転載)

2012 年の研究では、前述（第 6 章）のタイプ別クラスで 1) ～ 5) までのクラスを対象にデータを取った（表 1）。

表 1. 「気づき」の出現頻度（クラス別）(山本・臼倉 2012)

クラス (クラス数)	A タイプ	B タイプ	総 数	ディクトグロス 実施回数(のべ)	1 クラス当たり 平均実施回数
通訳演習 (3)	39 (62%)	24 (38%)	63 (100%)	8 回	2.7 回
IP (2)	51 (70%)	22 (30%)	73 (100%)	6 回	3 回
一般英語 (1)	55 (79%)	15 (21%)	70 (100%)	6 回	6 回
資格試験 (1)	41 (71%)	17 (29%)	58 (100%)	1 回	1 回
Reading(1)	31 (100%)	0 (0%)	31 (100%)	3 回	3 回

A タイプ（自己モニタータイプ）と B タイプ（ストラテジータイプ）の気づきの出現頻度（%）をクラス別で比較すると、通訳演習クラス、IP クラス、資格試験クラスは B タイプの気づきの出現頻度が他のクラスと比べて



多い。この3つのクラスと他のクラスの学習者を比べて見ると、英語学習に対するモチベーションがより高いと言える。これらの学生達の英語力を見てみると、通訳演習クラスは上級者レベル（TOEFL ITP 480 点以上）で IP クラスは英語集中クラスのため、授業内外で大量の英語に触れている。このことから、B タイプの気づきを促すには、ある程度の英語力が必要とされる可能性がうかがえる。しかしながら、全体を見ると、どのクラスも A タイプの気づきの方が多いと言えよう。

学生達のコメントの実例を挙げると下記のようになる（表2）。

表2. 自己モニタータイプの気づきの分類と実例（山本・臼倉 2012）

①単語	「単語が覚えられていない。」
	「soil に s がつくということを認識していなかった。」
	「every は単数形にする。」
②スペリング	「つづりが書けないことが多い。」
③文法	「文法が理解できていない。」
	「メモしたことから文を作るのが難しかった。」
	「過去形にするのを忘れている。」
	「接続詞の入れ方がどうなのか間違えてしまう。」
④聞き取り	「前置詞や冠詞が聞き取れていないことが多かった。」
	「単語をひとつずつしか聞き取ることができなかった。」
	「文の最初と最後の文はけっこう聞き取れるが、真ん中がだめ。」
	「自分が覚えていない単語は聞き取るのが難しい。」

このコメントからも、学生達が「文法」への気づきを認識していることがわかる。ディクトグロスを行うことにより、文法を意識的に考える習慣が身に着くことも期待される。

自己モニター分類の、どの項目の「気づき」が多いか調査した結果が表3である。この結果から見ても、文法への気づきが一番多いことがわかる。実例からは、単語部分の分類でも文法に関連しているものも見られる。B タイプ（ストラテジータイプ）の実例も見てみよう（表4）。

表3. 自己モニタータイプの気づき (クラス別) (山本・臼倉 2012)

クラス	単語	スペリング	文法	聞き取り	総数
通訳演習	1 (3%)	2 (5%)	21 (54%)	15 (38%)	39 (100%)
IP	2 (4%)	1 (2%)	21 (41%)	27 (53%)	51 (100%)
一般英語	1 (2%)	6 (11%)	25 (45%)	23 (42%)	55 (100%)
資格試験	2 (5%)	8 (19%)	15 (36%)	17 (40%)	42 (100%)
Reading	8 (26%)	13 (42%)	4 (13%)	6 (19%)	31 (100%)

表4. ストラテジータイプの気づきの分類と実例 (山本・臼倉 2012)

①メモの取り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 頭文字だけメモをしてあとは文法的に予想して埋めていけばできるのだとわかった。</li> <li>・ 聞こえているのにメモをとるのが下手でスピードについていけなかった。</li> <li>・ 複数形の s や冠詞はメモに強調のしるしをつけるなど工夫しようと思った。</li> <li>・ メモを取る段階で、何に注意していけばいいとか、3回聞けるので、それぞれの回では何に耳を傾けるかなどわかった。</li> <li>・ 単語を書いていったが、文章の流れがつかめていなかった。動詞と前置詞を書くようにしたら、覚えが変わった気がした。</li> </ul>
②聞き方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ リスニング中に自分の頭の中で整理することが大切だと思った。</li> <li>・ 文法を考えながら聞くと覚えやすい。細かなところを (複数形、the) 注意して聞かないといけない。</li> <li>・ 聞いて「当たり前だ」と思ってしまうことほど後で忘れてしまう。珍しい情報ほど頭に残る。</li> <li>・ 一部分でなく全体を聞くようにしたい。</li> </ul>

これらのコメントを見ても、学生達が文法に言及していることがわかる。クラス別の「気づき」は表5のようになる。

学生達は、原文復元作業を行うときには、聞き取れなかった部分やメモを取れなかった部分を推測する必要があり、その時に文法力が必要となるとい

表5. ストラテジータイプの気づき (クラス別) (山本・臼倉 2012)

クラス	メモの取り方	聞き方	総 数
通訳演習	16 (67%)	8 (33%)	24 (100%)
IP	12 (55%)	10 (45%)	22 (100%)
一般英語	9 (60%)	6 (40%)	15 (100%)
資格試験	2 (12%)	15 (88%)	17 (100%)
Reading	—	—	—

うことに気づいていると言えよう。

2016 年以降の研究では、前章で実践背景をくわしく説明した **English for Tourism** のクラスで、ディクトグロスシートに書かれた学生達のコメントを分析していった。コメントの分析分類項目として、2012 年に行った前述の 2 タイプ (自己モニタータイプ、ストラテジータイプ) の他に、「協同学習タイプの気づき」「モチベーションタイプの気づき」「その他 (ディクトグロスの有効性に関する気づき)」を加えた。これは、同じ学生達の 4 回のディクトグロスシートを調べていくうちに、これまでの 2 タイプには入れることができないまとまった種類のコメントがあることに気づいたからである。2016 年の研究で基幹となったこれら 5 種類の「気づき」は、まとめると以下のように説明される。

#### A. 自己モニタータイプの気づき

・現在の自分の能力で表現できないことのギャップに気づくきっかけになる。

→ 自分の思考 (の結果とプロセス) について思考する

→ 自分の使用言語について考え、議論する

本研究では、下位項目として

1) 単語 2) スペリング 3) 文法 4) 聞き取り 5) 達成感

6) メモ取り 7) その他 を設定した。

#### B. ストラテジータイプの気づき

- ・ 原文復元作業を成功させるために試行錯誤し、いろいろ考えるようになる。

→ メタ認知ストラテジーを鍛える

本研究では、下位項目として

1) Dictogloss のストラテジー 2) 自習ストラテジー を設定した。

C. 協同学習タイプの気づき

- ・ 協同して作業することで、ひとりで学習しているときには気づかなかったことに気づくことができ、互いに学び合うことができる。
- ・ ひとりではできないことも、友人と協力しあってやり遂げることで、自信を持つようになる。

D. モチベーションタイプの気づき

- ・ 自分の不得意分野に気づき、それを克服したいという気持ちを持つ。
- ・ ディクトグロスを通して英語学習への更なる意欲が生まれ、英語力を向上させるために更に努力しようという気持ちになる。

E. その他（ディクトグロスの有効性に関する気づき）

上記5つのタイプ別気づきとはどのような内容か、実際の学生達のコメント記述例を示す。これらのコメントは、2016年後期に English for Tourism の学生達から回収したディクトグロスシートから抜き出したものである。

1回目 32人（2016年9月13日）

2回目 24人（2016年10月3日）

3回目 15人（2016年11月4日）

4回目 21人（2016年11月28日）

## 記述例

A. 自己モニタータイプの気づき

- ・ ディクテーションで私の苦手なところは、英単語の発音を間違っ  
て認識していたために、英単語が浮かばないところだと感じました。  
[単語]
- ・ 耳で聞いて、英語でメモを取ることが難しいと感じました。  
[メモ取り]

- ・前置詞や副詞の使い方をあまり理解していませんでした。[文法]
- ・ **the** や **s** の音をあまり聞き取れていなかった。[聞き取り]
- ・先週に引き続きスペルミスがあるので今後の課題となりました。[スペリング]
- ・間違いもほとんどなく、少しずつではありますが英語が身についてきている気がします。[達成感]

#### B. ストラテジータイプの気づき

- ・練習を応用して、普段からディクテーションを行う前に、和訳を見ながら英語で話す練習をしていけば、**speaking** の力もつくと感じたので、早速実践していきたいです。[自習ストラテジー]
- ・音だけで聞き取りをしているとあまり文法を考えないで自分が書いていることに気が付きました。[Dictogloss ストラテジー]

#### C. 協同学習タイプの気づき

- ・聞き取ったところをただ淡々と答え合わせをするより、自分でアクションを起こすことができるので、楽しくグループでディスカッションできました。
- ・同じグループの人に助けられた。
- ・みんなで助け合えば、文章を作れることが一番良いと思った。
- ・みんなで確認するとコミュニケーションもとれるし、自信がない生徒も発表する前に確認ができて良いと思いました。

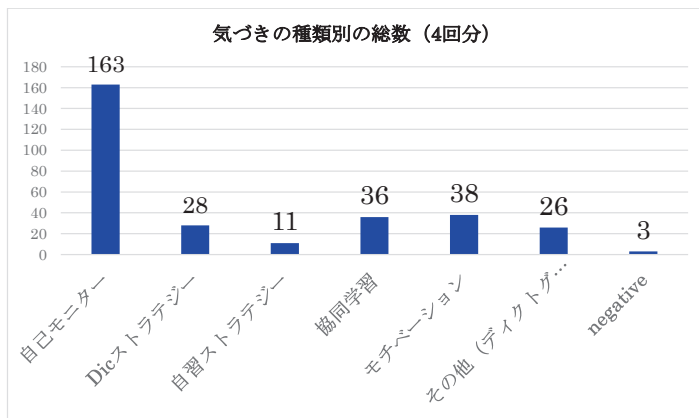
#### D. モチベーションタイプの気づき

- ・日頃から、わからない英単語の意味だけでなく、発音も習得していきたいです。
- ・文法の知識も曖昧なので、確かなものにしていきたい。
- ・日々の勉強の中で、シャドーイングも取り入れていくべきだと感じました。

#### E. その他

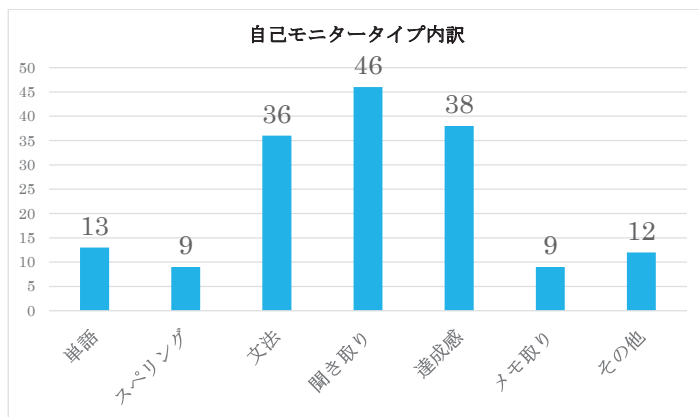
- ・英語の聞く・書く力が伸びるので良いと思いました。[有効性]
- ・この学習はペアワークですが、自分が考える暇もなく周りが答えていくので、もう少し自分で整理する時間がほしいです。[negative]

図2. 気づきの種類別比較  
(言語教育エキスポ 2018 口頭発表資料)



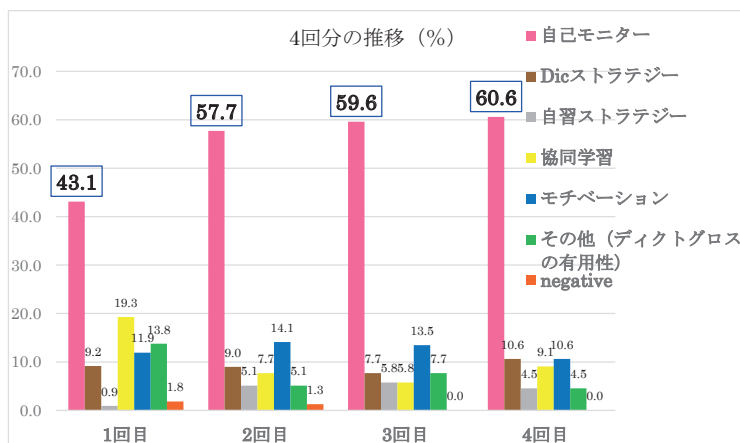
この図から、学生のコメントは2012年までと同様、やはり自己モニタータイプが一番多いことがわかる。

図3. 自己モニタータイプの気づきの内訳  
(言語教育エキスポ 2018 口頭発表資料)



自己モニタータイプ 163 件を下位項目でわけると図3のようになり、「聞き取り」「達成感」「文法」が上位を占めることがわかる。

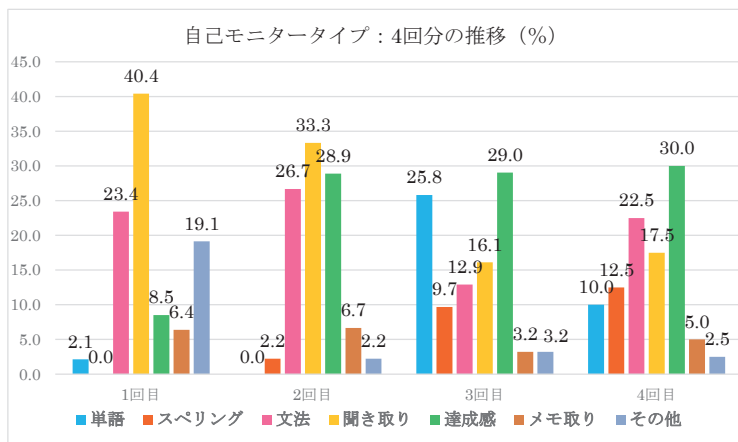
図4. 気づきの推移  
(言語教育エキスポ 2018 口頭発表資料)



どの回も自己モニタータイプが突出しているが、初回は、ディクトグロスを通して自分自身を客観的に見る姿勢に慣れていなかったということが考えられる。徐々にやり方がわかるにつれて、この活動を通して自分の英語力への気づきが増えていったと言える。協同タイプやモチベーションタイプも多く表れている。それでは、自己モニタータイプの気づきの内訳では、4回分の推移はどうなっているだろうか。

図5から、学生の気づきの中で、回を重ねていくごとに「達成感」を感じていることがわかる。これは、ディクトグロスの活動に慣れてくるにつれて英文を復元できるようになり、その喜びから達成感を味わっていると思われる。

図5. 自己モニタータイプ内訳の推移  
(言語教育エキスポ 2018 口頭発表資料)



## 8. 結論

本論では、ディクトグロスの有効性を様々な観点から検証してきた。長年に亘る筆者の実践から裏付けられる考察からもわかるように、学生達を積極的に授業に参加させ、活気ある授業を行うためにディクトグロスは有効なツールである。文法指導ばかりではなく、学生達が学習したすべての知識を総動員させて、内化した知識を外化することができるアクティビティであると言えよう。ディクトグロス後の学生達の気づきの分析からもわかるように、ディクトグロスを実施することにより、学生達は様々な気づきを得る。自分の英語力の無さへの気づきや、それにより「勉強しよう」という意識を持つようになり、何を勉強すればいいか自分で考えるようになる。アクティブラーニングは、教師目線から、学生達を参加させるための授業と捉えられがちだが、学生目線に立った場合、学生達が学びたいと思う授業、やる気がでる授業を常に考えるべきである。どのような授業を行うかは、教員ひとりひとりに任されていることであり、学生のやる気を引き出す授業を提供できるように工夫することが必須である。

序論でも述べたが、文法学習において学生達のやる気を引き出すためには、



様々な工夫が必要だが、本論で有効性を検証してきたように、一つのツールとしてディクトグロスを取り入れることを提案したい。ディクトグロスのスクリプトに学習させたい文法事項を盛り込むことにより、復元中または復元後に文法のディスカッションが起こる。これを教師がうまく取り上げて、クラス全員でその文法事項を話し合うようにさせれば、退屈になりがちな文法授業が学生を巻き込んだ授業へと変化する。現在、一般英語のクラスで各ユニットに必要な文法事項を入れたディクトグロスを行えるテキスト『*Taking Action*』（金星堂）を使用して、学生達の状況を観察中である。概ね、どのユニットでも文法についての活発な意見交換が起きている。本論でもくわしく説明してきたが、ディクトグロスは学生のレベルにあったディクトグロススクリプトを提供することで、どのレベルの学生達にも使用することができるアクティビティである。アクティブラーニング型授業が難しいと考えられがちな文法授業を活性化するひとつの手段として、ディクトグロスを取り入れることを提唱する。ただし、学生達に「やる気」を引き出すアクティブラーニングは単なる形式だけではなく、教師が「やる気」をもって授業を行うことから生み出されるものであるということを付け加えたい。

## 参考文献

- Brown, Douglas H. (2001). *Teaching by principles: an interactive approach to language pedagogy*, second edition. NY: Pearson Education.
- Jacobs, G. M., & Goh, C. C. M (2007). *Cooperative learning in the language classroom*. Singapore: SEAMEO Regional Language Center.
- Lantolf, J. P., & Throne, S. L. (2000). *Sociocultural theory and second language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- Long, Michael H. (1997). "Focus on form in task-based language teaching. McGraw-Hill Company, Fourth Annual McGraw-Hill Satellite Teleconference." Retrieved June 5, 2010, from <http://www.mhhe.com/socscience/foreignlang/conf/option3.htm>
- McCafferty, S. G., Jacobs, G. M., & Iddings, A. C. D. (2006). *Cooperative learning and second language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, Paul. (2007). The four strands. *Innovation in Language Learning and Teaching*, vol. 1. 1. 1-12.

- Swain, Merrill. (2000). The output hypothesis and beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue. In J. P. Lantolf (Ed.), *Sociocultural theory and second language learning* (pp. 97-114). Oxford: Oxford University Press.
- Swain, Merrill. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. (pp. 471-483). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Wajnryb, Ruth. (1990). *Grammar dictation*. Oxford: Oxford University Press.
- Williams, Jessica. (2005). Form-focused instruction. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning*. (pp. 671-691). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- 和泉伸一 (2009) 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』(東京:大修館書店)。
- 染谷泰正 (2010) 「プロダクション訓練の方法論とその理論～インプットからアウトプットへの橋渡し」(財)東京私立中学高等学校協会・東京私学教育研究所主催平成22年度文系教科研究会講演講演録。
- 広瀬直子 (2014) 『日本のことを1分間英語で話してみる』(東京:中経出版)。
- 松下佳代 (2015) 『ディープアクティブラーニング』(東京:勁草書房)。
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(東京:東信堂)。
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』(東京:大修館書店)。
- 山本成代 (2011) 「ディクトグロスを取り入れた英語授業の有効性」。*『Media, English and Communication』* No. 1 (通巻第50号)、pp.119-133。
- 山本成代・白倉美里 (2012) 「学習者のレベルに合わせたディクトグロスの実践と学習者の気づき」*『Media, English and Communication』* No. 2 (通巻第51号)、pp. 126-146。
- 山本成代・Kimura, Kelly (2018) *『Taking Action』* (東京:金星堂)。

## 執筆者紹介（掲載順）

水 元 昇 （本学 国際ビジネス学科 教授 副学長）

金 井 正 （本学 名誉教授）

楠 田 直 樹 （本学 国際ビジネス学科 教授）

山 本 成 代 （本学 国際ビジネス学科 教授）

---

### 創価女子短期大学紀要委員会

委員長 楠 田 直 樹

委 員 大 野 智 弘

山 本 成 代

石 川 由紀子

事 務 鎌 原 美枝子

創価女子短期大学紀要

第50号

---

2019年2月27日

編集・発行人 創価女子短期大学紀要委員会

東京都八王子市丹木町1-236

(042) 691-2201 (代)

編集委員長 楠 田 直 樹

---



No.50

**JOURNAL**  
**of**  
**Soka Women's College**

February 2019

**Foreword**

On the Publication of Journal No.50 ..... Noboru MIZUMOTO (3)

**Final Lecture**

Brief Biography of Professor Tadashi Kanai ..... (7)

Looking back on a road of my study

— a bouquet of flowers for the future to you ..... Tadashi KANAI (9)

**Articles**

Pytheas of Massalia and the Mystery Concealed by Thule (2)

..... Naoki KUSUDA (19)

The effectiveness of dictogloss which enables students

to learn grammar through active learning ..... Shigeyo YAMAMOTO (41)